

地域の希望とウェルビーイング

有馬, 雄祐
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門 : 助教

<https://hdl.handle.net/2324/7363256>

出版情報 : pp.120-136, 2023-09-29. LIFULL Co.,Ltd.
バージョン :
権利関係 :



地域の希望とウェルビーイング

有馬 雄祐

九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門助教

ありま・ゆうすけ／職業能力開発総合大学校（PTU）特任助教を経て2022年より現職。東京大学博士（工学）。専門は建築環境工学。熱環境など物理面から建築環境の予測・評価を行うほか、ウェルビーイング概念に基づく心理面からの環境評価にも取り組む。

>>「A. 分析の詳細」を本報告書 WEB版で公開しています。

<https://www.homes.co.jp/souken/report/202309/>

1

人生における希望

人間以外の動物について、「彼は幸せそうである」という表現はしっくりくる状況もありそうだが、「彼は希望に満ちている」と表現してみても、あまりしっくりこないに違いない。人間という存在を置いて他に、「希望（ホープ）」という言葉がよく似あう動物はいないように思われる。希望が、人間にとって特有な問題となる理由は、私たちの未来を予測する能力と密接に関係しているように思われる。未来を予測する力がない限り、希望など抱きようがないし、問題にさえなり得ないはずだからである。

一方で、未来が完全に予測可能なものであったならば、確定した未来に希望など抱きようがないし、そもそも抱く必要すらない。私たちが生きている現実には、「偶然」としか呼びようのない予想外の出来事で溢れている。偶然に満ちた人生を、可能な限りの予測力を働かせながら切り開かせてくれる、未来を創造していくうえでの精神的な力が「希望」と呼ばれるものの実体なのではないだろうか。

「希望」とは何か。そう考えながら読んだ本の一つに、三木清という哲学者が書いた『人生論ノート』^[1]がある。希望について、上述の内容と似た主旨のことが書かれているため引用しておきたい。希望とは、生命を形作る力であると三木は言う。生命という言葉は、人生と読み替えてくれてかまわない。

「希望というものは生命の形成力以外の何物であるか。我々は生きている限り希望を持っているというのは、生きることが形成することであるためである。希望は生命の形成力であり、我々の存在は希望によって完成に達する。生命の形成力が希望であるというの

は、この形成が無からの形成という意味をもっていることに依るであろう。運命とはそのような無ではないのか。希望はそこから出てくるイデー的な力である。希望というものは人間の存在の形而上学的本質を顕すものである。希望に生きる者はつねに若い。いな生命そのものが本質的に若さを意味している」

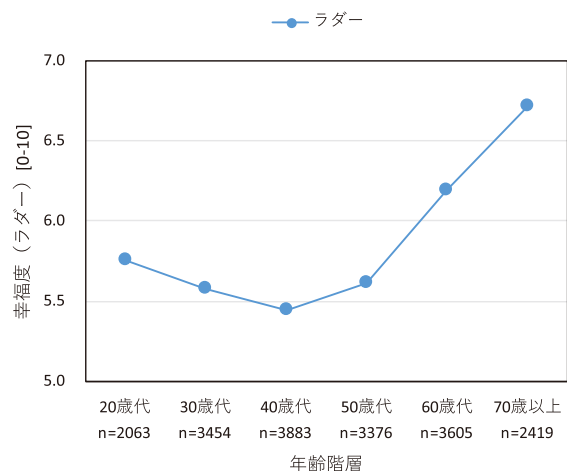
（三木清『人生論ノート』）

「希望に生きる者はつねに若い」と、三木は希望を「若さ」と関連づけて論じているが、ここでウェルビーイング研究における知見を一つ紹介しておきたい。ウェルビーイングとは人生における良い状態を、幸福度を中心とする測定可能な要素で定義した、幸福を意味する科学的な概念である。この分野の主導的な研究者の一人である経済学者アンガス・ディートンは、希望と年齢の関係性についての興味深い事実を2018年の論文で報告した^[2]。国連が発表している世界幸福度ランキングでも使用される幸福度の代表的な尺度にキャントリル・ラダーがある。一般的なキャントリル・ラダーは、現在の人生の状況を最低な人生（0点）から最高の人生（10点）で評価するものだが、5年後の未来の状況を予想して回答させる未来版の形式もある。ディートンは、ギャラップ世論調査の世界166カ国の調査データから、キャントリル・ラダーの現在の幸福度と未来の幸福度の差分を算出し、年齢との関係性を分析した。すると、未来の想像された幸福度は現在の幸福度を上回り、しかも両者の差分は若者ほど大きく、年齢が増加するにつれて差分は減少していく傾向がある事が確認された。未来の幸福度と年齢のこうした関係性

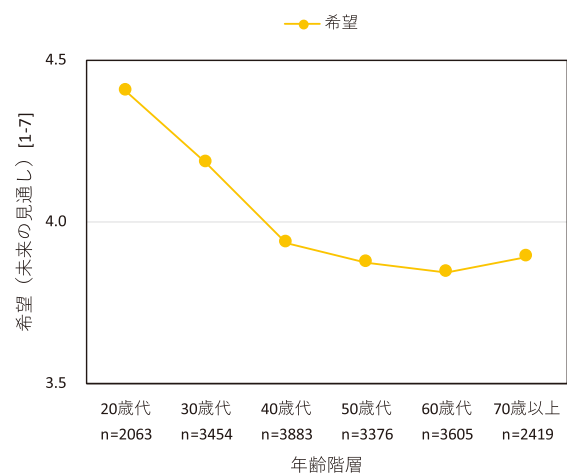
は普遍的であり、世界全体ではもちろん、ヨーロッパ、アジア、共産圏などのそれぞれの地域においても同じ傾向が観測される。人間には未来は現在に比べて良くなるだろうと考える傾向があり、明るい未来を期待する精神の傾向は、世界中どこであれ若者ほど強いのだ。心理学者のダニエル・カーネマン^[3]は、未来に対するこうした精神の偏見（バイアス）こそが、「資本主義の原動力」であると論じている。

本報告書のために実施した全国18800人の調査データを用いて、希望と年齢の関係性を見てみよう。希望に関連する設問として、本調査では現状の幸福度をキャントリル・ラダー^{注1}で質問したうえで、「あなたの10年後の未来を想像してください。前問で10点満点でお答えいただいた「あなたの人生の位置」は、良くなっていると思いますか、それとも悪くなっていると思いますか」という質問を用意した。回答は、「とても悪くなっている」「悪くなっている」「どちらかといえば悪くなっている」「変わらない」「どちらかといえば良くなっている」「良くなっている」「とても良くなっている」の7段階で回答させており、1点から7点で得点化した。ここでは、こうして測定された10年後の未来の見通しを「希望」[1～7点]と呼ぶことにする。まず、基準となるキャントリル・ラダーの「幸福度（ラダー）」[0～10点]と年齢の関係性について図1に示す。「幸福度（ラダー）」が「40歳代」付近を底とするU字カーブを描く「中年の危機」と呼ばれる現象が確認できる。また、我が国では「60歳代」「70歳代」の高齢層の幸福度が最も高いことも確認できる。次に、図2に「希望」と年齢の関係性を示す。「希望」は「20歳代」が最も高く、次いで「30歳代」、そして「40歳代」「50歳代」と続き、基本的に年齢が若いほど高い明確な傾向があることが見てとれる。やはり、若者ほど未来は今よりも明るくなるだろうという希望を抱いているようだ。

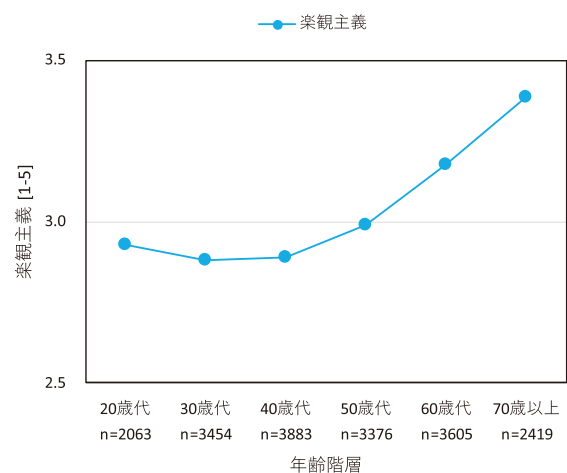
希望に類似した心理学的な概念に、楽観主義（オプティミズム）がある。いずれも明るい未来に対する期待を含んだ概念であるが、両概念を対比的に分析した場合、希望は目標を実現するための個人の能力や意志に焦点を当てたものであるのに対して、楽観主義は未来に対する制御に焦点を当てたものではないと説明される^[3]。両概念の定義は文献によっても異なるため、明るい未来を期待する個人の性格的な傾向をここでは「楽観主義」と呼ぶことにしたい。本調査では楽観主義の程度について、「あなたご自身の性格についてお聞きます。あなたは、だいたいにおいて物事を楽観的に考える方ですか、それとも悲観的に考える方ですか」という質問に対して、「とても悲観的な性格（1点）」「どちらかといえば悲観的な性格（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば楽観的な性格（4点）」「とても楽観的な性格（5点）」の5段階で回答させた。図3に楽観主義と年齢の関係性を示すが、個人の性格としての楽観主義は若者ほど高いということはなく、むしろ「50歳代」頃から年齢が増加するにつれて上昇する傾向があることが分かる。希望と楽観



〔図1〕幸福度（ラダー）と年齢

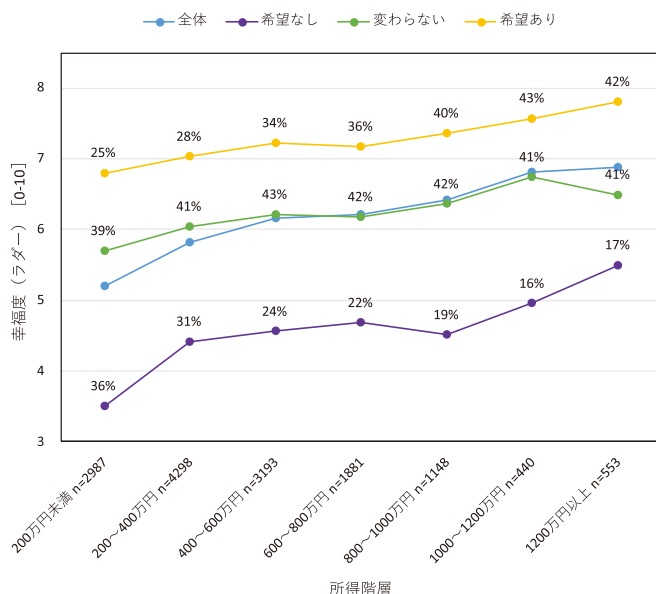


〔図2〕希望と年齢



〔図3〕楽観主義と年齢

主義の年齢との関係性は対称的であり、興味深い。明るい未来を見据える希望は若者ほど旺盛だが、楽観主義的な心の持ちようは高齢な者ほど強いのだ。若年層と高齢層のこうした相違は、ラダーで測定されるような幸福度が、若い者と高齢の者でたとえ同じ申告値であっても、その在り様は質的に異なるものである可能性を示唆している。



〔図4〕希望の有無ごとの各所得階層における幸福度（ラダー）の平均値
 （図中のパーセントの値は各所得階層で「全体」に占める「希望あり」「変わらない」「希望なし」の割合）

希望は、幸福にとって重要な問題であるのだろうか。調査の結果からは、希望は幸福の中核を成す要素であることが見てとれる。詳細は「A. 分析の詳細（表A4に記載のモデル1a～モデル1c）※本報告書WEB版に掲載」に示すが、希望の幸福度に対する影響を年齢や所得などの影響と共に分析した場合、所得や年齢以上の強い影響があることが確認でき、その効果は「人間関係」「仕事」「余暇生活」などの生活の領域満足からの影響よりも強い。ここでは、希望の幸福度に対する影響の強さを示すため、幸福度と所得の関係性が希望の有無でどのように異なるのかを見てみよう。

図4に全国14500人（18800人中で所得の回答ありの者）の世帯所得と幸福度の関係性を、希望の有無ごとに示す。「希望」の得点は先に述べた1点から7点であり、希望の有無は「どちらかといえば良くなっている（4点）」以上を「希望あり」、「変わらない（4点）」を「変わらない」、「どちらかといえば悪くなっている（3点）」以下を「希望なし」として回答者を分類した。個人属性の中でも、所得はキャントリル・ラダーで測定された幸福度との結びつきが強く、高所得な者ほど幸福度が高いことが知られている（図4の「全体」参照）。しかし、たとえ同じ所得階層の者であっても、希望の有無で幸福度に大きな相違があることが図4から見てとれる。また、異なる所得階層間で幸福度を比較した場合、高い所得があっても希望がない者は幸福度が低く、反対に希望がある者では、所得の状況に関わらず幸福度はかなり高い水準にある。例えば、所得が1200万円以上でも希望がない人たちの幸福度（5.5点）は、所得200万円未満の希望がある者の平均的な幸福度（6.8点）に遠く及ばない。

希望の有無は、客観的な生活の状況以上に幸福度を大きく左右しているようである。

キャントリル・ラダーで測定された「幸福度（ラダー）」[0～10]が10年後の未来の見通しを意味する「希望」[1-7]によって大きく左右される事実、それほど自明な結果ではないだろう。理屈の上では、未来の見通しに関わらず、人生に満足しているという状況も十分に成立するように思われる。しかし、実際には現状の幸福度と希望は不可分な関係性にある。表1に、幸福度（ラダー）の程度を「低・幸福度（4点以下）」「中・幸福度（5点、6点）」「高・幸福度（7点以上）」で区分して、希望の有無でそれぞれの割合を示す。希望のない人たちはその大半が幸福度も低く（51%）、反対に希望のある者は殆どが高い幸福度を申告している（71%）。私たちが自身の人生に下す評価には、希望という未来への見通しが多分に含まれるものであるらしい。希望は、人間の幸福にとって本質的な要素を成しているのだ。

希望について理解が深まったところで、次節から本稿の中心的な関心である「地方の希望」が、私たちの人生において果たす役割について分析していこう。つづく「2. 地域の希望、シビックプライド、及び幸福度」では、地域の希望やシビックプライドの特徴について把握する。シビックプライドは、地方創生の文脈で注目されている概念であり、本稿では地域の希望と共にその特徴や効能を分析する。「3. 地域の希望と幸福度、及び地方創生に寄与する意識」では、地域の希望が住人の幸福度や、定住意向といった地方創生に寄与する意識に与える影響を、重回帰分析という手法で評価する。「4. 地域の希望を生み出す要因」では、地域の希望が地域のどのような状態によって生み出されるのか、その決定要因を分析する。「5. 寛容性から地域の希望へ」では、以前の報告書『寛容と幸福の地方論』でも扱った地域の「寛容性」が、地方創生において果たす役割について分析する。寛容性が地域の希望に繋がる地域の状態を育み、住人と地域に効能をもたらすという因果的な仮説を、構造方程式モデリングという手法で分析する。最終節では、得られた実証的な知見を基に、地域の希望が地方創生において果たす役割について論じる。

尚、以下の分析で使用する調査データは、いずれも2023年5月にWeb調査会社を介して実施された各都道府県で400人、全国18800人を対象とした調査で得られたものである。

〔表1〕希望の有無ごとの幸福度の高・中・低の割合

		低・幸福度 (4点以下)	中・幸福度 (5点、6点)	高・幸福度 (7点以上)
希望あり（現状より良くなる）	n=5600	9%	20%	71%
現状と変わらない	n=8071	14%	43%	43%
希望なし（現状より悪くなる）	n=5129	51%	31%	18%

2

地域の希望、シビックプライド、及び幸福度

2.1 地域の希望

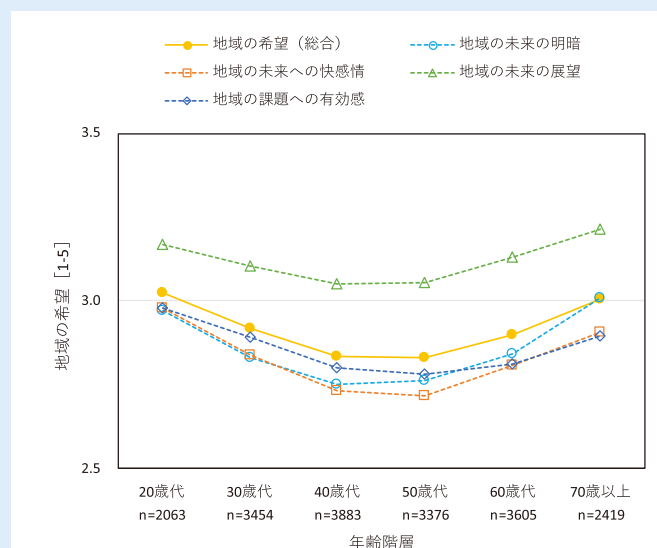
希望は幸福における中心的な問題であることが確認されたが、自身が住んでいる地域に対して抱かれる地域の希望は、住人の幸福度や、定住意向などの地方創生に関わる意識に対して、どのような影響があるのだろうか。まずは、地域の希望の特徴を把握しておこう。

本分析における地域の希望は、「地域の未来の明暗」「地域の未来への快感情」「地域の未来の展望」「地域の課題への有効感」の4種類の設問で構成される。これら4指標の平均値で、「地域の希望」の得点[1～5点]を算出した。「地域の未来の明暗」は、「あなたが住んでいる地域の10年後についてお聞きします。あなたが住んでいる地域の未来は明るいと思いますか、それとも暗いと思いますか」という質問に対して、「暗いと思う(1点)」「どちらかといえば暗いと思う(2点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかといえば明るいと思う(4点)」「明るいと思う(5点)」の5段階で評価した。「地域の未来への快感情」は、「あなたが住んでいる地域の10年後の未来を想像するとき、あなたはどのような気持ちになりますか」という質問に対して、「ワクワク待ち遠しい気持ち」「明るく楽しい気持ち」「元気で前向きな気持ち」「穏やかで平穏な気持ち」「なんとなくやる気ない(1点)」「あまり感じない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「まあ感じる(4点)」「強く感じる(5点)」の5段階で評価した。序章において島原万丈氏が、「希望」の定義として「希望は来たるべき未来に明るさがあるという感知に伴う快調を帯びた感情」(北村晴朗「希望の心理 自分を生かす」)を採用したと述べているが、「地域の希望」を構成するこれら2種類の設問は、この定義を最も直接的に反映した内容である。

「地域の未来の展望」は、「現在、あなたが住んでいる地域にもいろいろな課題があると思いますが、地域の未来を良くすることが可能だと思いますか。以下の項目についてどの程度あてはまるかお答えください」という質問に対して、「この地域には埋もれた魅力や可能性がたくさんある」「いろいろ課題はあっても、この地域をより良い場所にするための方法はある」「この地域にはいろいろな課題を解決できる人材がいる」「住民みんなが努力すれば、この地域をより良い場所にする事ができる」「この地域をより良い場所にするために、自分が貢献できることがある」の各展望の程度を、「そう思わない(1点)」「あまりそう思わない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「ある程度そう思う(4点)」「そう思う(5点)」の5段階で評価した。また、「地域の課題への有効感」は、「以下のような地域の課題について、あなたが住んでいる地域は対処が可能だと思いますか」という

質問に対して、「この地域の人口減少は歯止めがかけられる」「若者のUターンや移住者を増やすことができる」「少子化に歯止めをかけて子どもを増やすことができる」「地域の経済を活性化させ、安心して働ける雇用環境が作れる」「ITなどテクノロジーを活用して地域の暮らしを便利にできる」の各課題への解決の可能性(有効感)の程度を、「そう思わない(1点)」「あまりそう思わない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「ある程度そう思う(4点)」「そう思う(5点)」の5段階で評価した。ウェルビーイング研究において希望(ホープ)は、未来は明るくなるだろうという期待に加えて、「目標を実現するための個人の能力と意思に焦点を当てた期待」^[4]であると定義される。また、希望の実証的な研究として代表的な心理学者リック・スナイダーによる「希望理論」^[5]では、明るい未来を実現するための「道筋(パスウェイ)」を考える能力と、その道筋に沿って行動を起こし、困難に衝突しても目標達成に向かって行動を維持する「主体性(エージェンシー)」の二つの側面で希望が定義される。「地域の希望」を構成する「地域の未来の展望」と「地域の課題への有効感」は、ウェルビーイング研究における希望のこうした定義に沿ったものである。

人生全般における希望は年齢と密接な関係にあることを確認したが、「地域の希望」と年齢の関係性はどうか。図5に年齢階層ごとの「地域の希望」(下位指標も含む)[1～5点]の平均値を示す。「地域の希望」とこれらを構成する指標はいずれも、「20歳代」の若年層で高く、「40歳代」「50歳代」で底となり、「70歳以上」に向けて再び上昇するU字カーブを描くことが見てとれる。若年層で高い傾向があるのは、人生全般における「希望」で確認された通り、



【図5】 各年齢階層における地域の希望の平均値

未来への見通しが若者ほど高い傾向があることを反映した結果であると推察される。また、「地域の希望」が「60歳代」「70歳代」で向上する理由は、年齢が高くなるほど地域における居住年数が増える傾向がある事など、「地域」という対象の特徴が反映された結果であると推察できる。

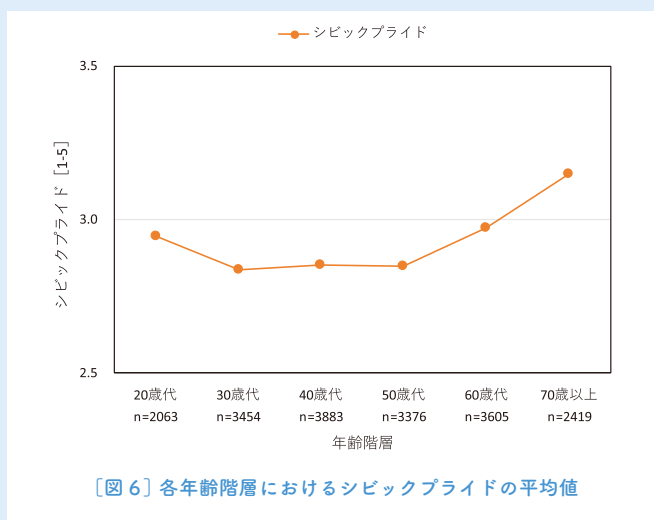
2.2 シビックプライド

地方創生の文脈でよく議論される概念に「シビックプライド」がある^[6]。シビックプライドは「地域に対する市民の誇り」と訳せるが、「地元愛」や「郷土愛」、ないし「地域への愛着」といった、生まれ育った故郷や住んでいる地域に対して抱かれる好意的な感情に加えて、その地域をより良いものにするため貢献しようとする心境などを含む包括的な概念である。本報告書では「地域の希望」という地域に対して抱かれる主観評価・感情の新しい側面に着目しているが、「地域の希望」の特徴を相対的に把握するためにも、シビックプライドについても測定した。本調査において「シビックプライド」は、「あなた自身は現在お住まいの地域について、どのように考えていますか」という質問で、「私は、この地域への愛着が強い」「私は、この地域に誇りを感じる」「この地域で生きていることが、私の個性の一部だと感じる」「私は、全国の人たちにこの地域の魅力を知ってもらいたい」「私は地域の一員として、この地域の未来に対して責任があると感じている」の程度を「全然あてはまらない（1点）」「どちらかといえばあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばあてはまる（4点）」「とてもあてはまる（5点）」で評価した。「シビックプライド」[1～5点]は、これら5項目の得点の平均値で算出した。

図6に各年齢階層における「シビックプライド」の平均値を示す。シビックプライドと年齢についても緩やかなU字カーブが観察されるが、「20歳代」における平均値は他の年齢層に比べてそれほど高くなく、「60歳代」「70歳代」と高齢層でのシビックプライドの方が高い。「地域の希望」と年齢の関係性と比較した場合、「地域の希望」はより若者に、「シビックプライド」はより高齢の者にそれぞれ強く抱かれる傾向があることが分かる。

2.3 幸福度（ラダー、感情、エウダイモニア）

本調査ではキャントリル・ラダーによる幸福度（以降、「ラダー」）に加えて、「感情」「エウダイモニア」と呼ばれる幸福の領域も測定した。これら幸福度の3領域は、経済協力開発機構（OECD）で各領域の測定が推奨されている^[7]。「ラダー」は幸福の認知的側面を測定しており、所得などの生活の状況と強い正の相関があることが知られている。「感情」はその時々で経験される心の状態を測定した幸福の領域であり、健康や人間関係とより深い関わりがある。本

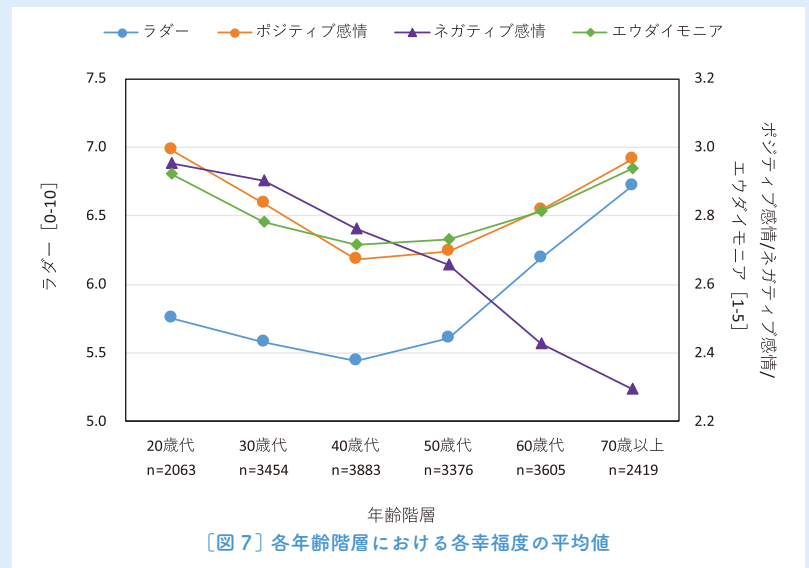


調査では、「過去1週間においてあなたはどのような気分でしたか。以下のそれぞれの気分を、どの程度感じていたかについてお答えください」という質問に対して、各感情を経験した頻度を「めったに、ほとんど感じていない（1点）」「あまり感じていない（2点）」「ときどき感じた（3点）」「よく感じた（4点）」「頻繁に、常に感じた（5点）」の5段階で評価した。測定したポジティブな感情は「幸せな気持ち」「明るく、楽しい気分」「愉快にはしゃぐ気分」「くつろいだ、リラックスした気分」「ワクワク夢中になる」の5項目、ネガティブな感情は「退屈な気分」「心配や不安な気持ち」「悲しい、辛い気持ち」「イライラ、怒り」「孤独や孤立感」の5項目であり、それぞれの平均値を「ポジティブ感情」[1～5点]と「ネガティブ感情」[1～5点]として算出した。また、ネガティブ感情はその少なさの程度を意味するよう反転項目として扱い、全ての感情の平均値として「感情」[1～5点]を算出した。

エウダイモニアは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスによって議論された幸福に起源があり、認知的な人生の満足や快楽的な感情では捉え難い、人間という存在の本質に根差した幸福である。現代の幸福度の文脈では、「人生の意味」や「自己成長」といった心理学的な概念で測定されており、本調査では「自己成長」「潜在的能力の発揮」「人生の意味」「自律性」「他者からの尊敬」に関わる項目で測定した。「ご自身や自分の生活について、あなたはどのように感じていますか。以下の内容がどのくらいあてはまるかについてお答えください」という質問に対して、「日々、人として成長している実感がある」「自分の能力を最大限に発揮して生きている」「自分という人間の価値や人生の意義を感じている」「これまで私は、自分の行動は周囲に流されずに自分自身で決めてきた」「社会の役に立ち人から尊敬されている」の状態を、「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度あてはまる（4点）」「とてもあてはまる（5点）」の5段階で評価して、それらの平均値として「エウダイモニア」[1～5点]を算出した。

幸福度の各種の領域の特徴の詳細については、『“遊び”からの地方創生』で幸福度を論じた箇所^[8]を参照願いたい、ここでは

各種の幸福度と年齢の関係性について確認しておきたい。図7に各年齢階層における「ラダー」「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」「エウダイモニア」の平均値を示す（「ラダー」は図1と同じ値）。「ポジティブ感情」「エウダイモニア」では「ラダー」と同様に、「40歳代」「50歳代」の中年期を底とするU字カーブが描かれるが、「ポジティブ感情」や「エウダイモニア」は「ラダー」と比較して「20歳代」や「30歳代」の得点が相対的に高く、若者でより高い傾向があることが確認できる。また、「ネガティブ感情」が年齢が増加するにつれて低減していく傾向は、「高齢のパラドックス」とも呼ばれており、高齢な者ほどネガティブな感情の経験が少ない事実は頑健性のある幸福現象の一つとして知られている。

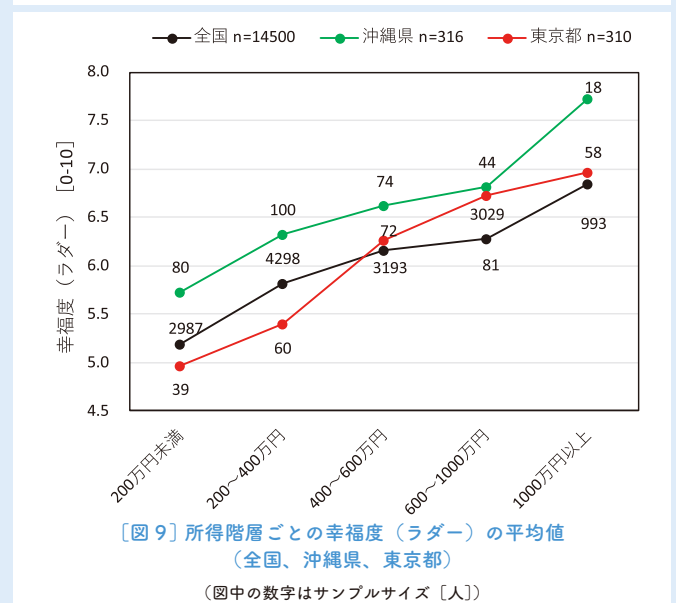
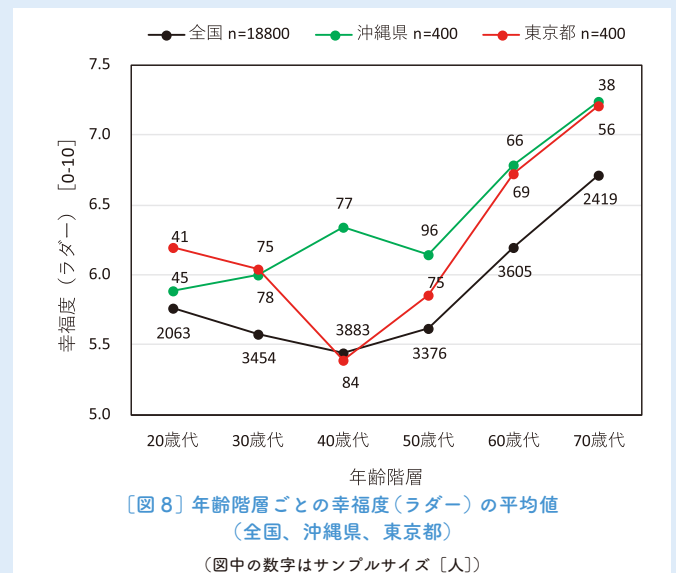


2.4 沖縄県の幸福度と地域の希望

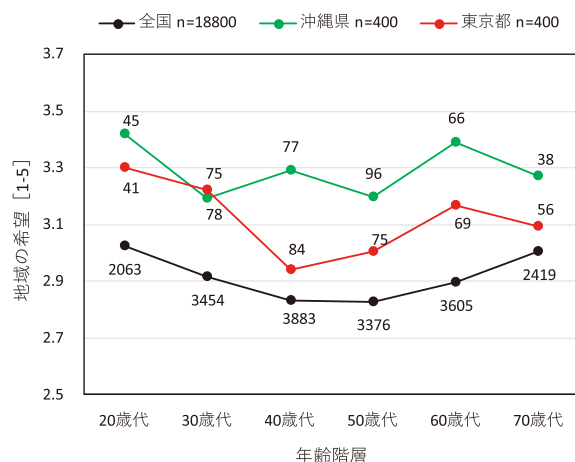
ところで、日本国内で各都道府県の幸福度を調査した場合、殆どの調査で沖縄県が最も高い幸福度となることが知られている（『寛容と幸福の地方論』^[9]も参照）。今回の調査においても、都道府県別の幸福度の平均値は沖縄県が最も高い。沖縄県の特異的な幸福度の高さの秘密は、どこにあるのだろうか。沖縄県の幸福度の実態を把握するため、年齢階層と所得階層ごとの幸福度を確認してみるとしよう。

図8に、全国、東京都、及び沖縄県における各年齢階層の幸福度（ラダー）の平均値を示す。幸福度と年齢の関係性は全国ではU字カーブとなっており、東京都においてはその傾向がより顕著である。「中年の危機」とも呼ばれるこの幸福現象は、中年期における所得格差の増大や社会的繋がり希薄化などが理由であると考えられる（筆者は『住宅幸福論Episode3』のコラム^[10]でこれを論じた）。一方の沖縄県では、「40歳代」「50歳代」での幸福度の低下が見られない。沖縄県では、「20歳代」の幸福度は東京都に比べてやや低いものの、一般に幸福度が低下する中年期においても高い水準が維持されている。次に、図9に所得階層ごとの幸福度（ラダー）の平均値を示す。東京都では「200万円未満」「200～400万円」の所得階層で全国の平均値を下回るが、沖縄県ではいずれの所得階層においても相対的に高い幸福度が維持されている。沖縄県における幸福度は、東京都など他の地域と比較すれば、所得の状況にそれほど依存していないようである。中年期という年齢層や低い所得階層など、一般的に幸福度が低下する層でも比較的高い幸福度が維持されていることが、沖縄県の統計的な幸福度の高さの理由であるようだ。

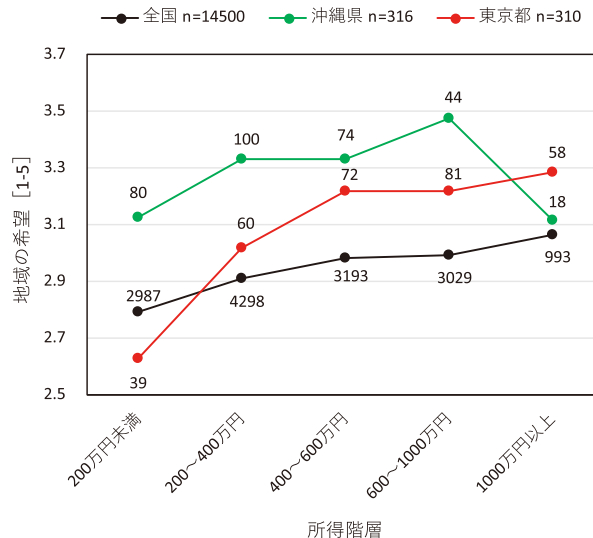
「地域の希望」の都道府県ランキングにおいても、沖縄県の平均値が最も高い。「地域の希望」[1～5点]についても同様に、図10と図11に年齢階層と所得階層ごとの平均値を示す。全国平均では



「地域の希望」は年齢に対してU字カーブを描くが、沖縄県ではそうした傾向は見られず、全ての年齢階層を通じて高い平均値となっている。所得階層ごとの平均値では、東京都では「200万円未満」や「200～400万円」の所得階層で「地域の希望」が低くなっているが、沖縄県では低い所得階層においても「地域の希望」は全国平均に比べて高い値となっている。幸福度と同様に、年齢や所得に関わらず地域に対して誰もが希望を抱ける状況が、沖縄県全体で見た高い地域の希望を支えているようである。



【図 10】年齢階層ごとの地域の希望の平均値
(全国、沖縄県、東京都)
(図中の数字はサンプルサイズ [人])



【図 11】所得階層ごとの地域の希望の平均値
(全国、沖縄県、東京都)
(図中の数字はサンプルサイズ [人])

3

地域の希望と幸福度、及び地方創生に寄与する意識

3.1 幸福度に与える影響度（重回帰分析）

「地域の希望」は個人の幸福度に対してどのくらい影響があるのだろうか。地域の希望が幸福度に与える影響度を重回帰分析で評価する。重回帰分析では着目している目的変数に対して、説明変数と呼ばれる各要因がどの程度の影響があるのか定量的に把握することが可能である。重回帰分析で推定される標準偏回帰係数は、ある説明変数が変化するとき、他の説明変数の影響を除いた目的変数に対する影響度の目安となる。目的変数は「ラダー」「感情」「エウダイモニア」の各種の幸福度に加えて、「希望」も考慮した。また、説明変数は「地域の希望」に加えて、「シビックプライド」と「生活の領域満足」を考慮した。尚、以下の重回帰分析では統制変数として、性別、年齢、結婚、子ども、無職、学歴、所得は全ての分析で考慮している^{注2}。分析で使用した変数の詳細については、「A. 分析の詳細」も参照を願う。

図12に各説明変数が幸福度に与える影響度として、「生活の領域満足」、「地域の希望」と「シビックプライド」の標準偏回帰係数

(β)を示す。まず、「地域の希望」は幸福度に対して大きな影響度があることが確認でき、その強さは「シビックプライド」よりも相対的に大きいことが確認できる。特に、幸福度の中では「エウダイモニア」に対する「地域の希望」と「シビックプライド」からの影響が強いことが確認でき(β はそれぞれ0.28と0.15)、地域という生活の領域がエウダイモニアの重要な源泉となっている可能性が示唆されている。また、「地域の希望」の幸福度に対する影響度は、生活の領域満足と比較しても十分に大きいことが確認できる。これらの分析結果から、「地域の希望」は個人の幸福度や希望にとって小さくない役割を果たしている事がうかがえる。また、「地域の希望」は人生全般の「希望」に対する大きな影響度($\beta=0.38$)が確認される一方で、「シビックプライド」の影響度は負の効果($\beta=-0.06$)となる。

3.2 地方創生に寄与する意識に与える影響度（重回帰分析）

次に、「地域の希望」が地方創生に寄与する意識に与える影響度

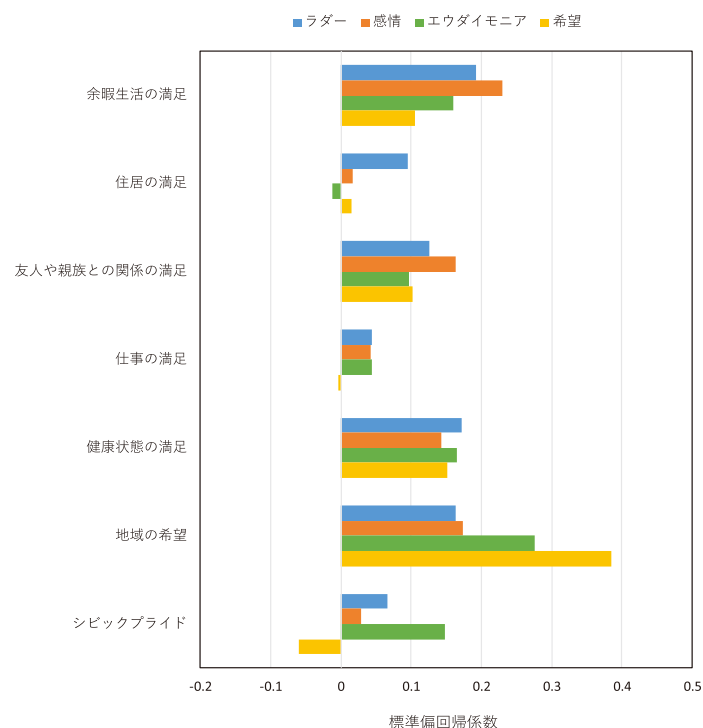
を分析する。重回帰分析で目的変数として「地域へのコミットメント」「挑戦意欲」「定住意向」を考慮した。説明変数は先の分析と同様である。

「地域へのコミットメント」は、「あなた自身は現在お住まいの地域への関わりについて、どのように考えていますか」という質問に対して、各項目を「全然あてはまらない（1点）」「どちらかといえばあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばあてはまる（4点）」「とてもあてはまる（5点）」の5段階で評価した。項目は、「町内会や地域のボランティア活動があれば積極的に参加したい」「お祭りやイベントなど地域を盛り上げる活動があれば手伝いたい」「新しい事業を起こして、地域の活性化に役立ちたい」「地域に困っている人がいれば手助けをしたい」「地域の政治行政からの要請には積極的に協力したい」「買い物や飲食はできるだけ地元のお店にお金を落としたい」「若い人が始める新しいお店やプロジェクトに金銭的な支援をしたい」「地域づくりに関する寄付やクラウドファンディングは積極的にしたい」「この地域に投資案件があれば検討したい」「この地域を離れたとしても「ふるさと納税」をしたい」であり、これら10項目の平均値で「地域へのコミットメント」[1～5点]を算出した。

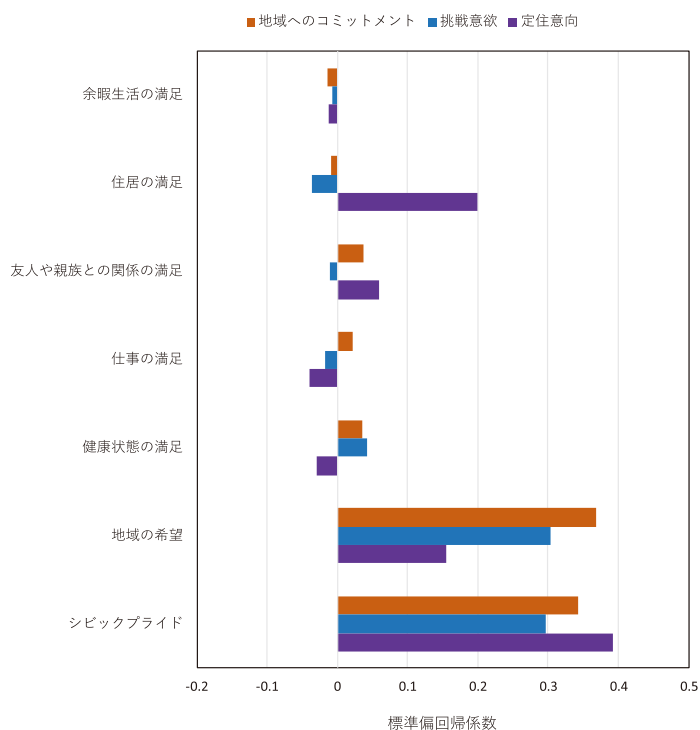
「挑戦意欲」[1～7点]は、「あなた自身は、お住まいの地域の「まちおこし・まちづくり」に関わる何か新しい活動を自ら始めるつもりがありますか」という質問に対して、「全然やりたいとは思わない（1点）」「やりたいとは思わない（2点）」「どちらかといえばやりたいとは思わない（3点）」「どちらともいえない（4点）」「どちらかといえばやりたい（5点）」「やりたい（6点）」「ぜひやりたい（すでにやっている）（7点）」の7段階で評価した。

「定住意向」[1～7点]は、「あなたはどの程度「いまお住まいの地域（市区町村）」にこれからも住み続けたい」と思っていますか。現在のお気持ちをお答えください」という質問に対して、「まったく住み続けたいと思わない（1点）」「住み続けたいと思わない（2点）」「どちらかといえば住み続けたいと思わない（3点）」「どちらともいえない（4点）」「どちらかといえば住み続けたいと思う（5点）」「住み続けたいと思う（6点）」「ぜひ住み続けたいと思う（7点）」の7段階で評価した。

図13に、各説明変数が地方創生に寄与する意識に関わる目的変数に与える影響度として、「生活の領域満足」「地域の希望」「シビックプライド」の標準偏回帰係数を示す。生活の領域満足では、「住居の満足」が「定住意向」に対して強い影響があることを除いて、地方創生に寄与する意識に対する強い影響は見られない。対して「地域の希望」と「シビックプライド」は、いずれも地



〔図12〕生活の領域満足、及び地域の希望とシビックプライドが幸福度に与える影響度
(表 A5 に記載のモデル 2a ～モデル 2d)

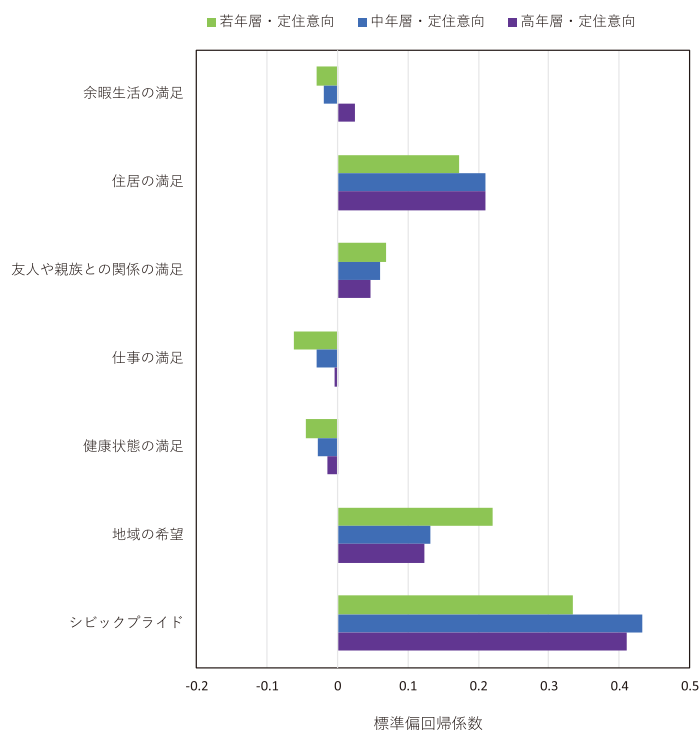


〔図13〕地域の希望とシビックプライドが地方創生に寄与する意識に与える影響度
(表 A6 に記載のモデル 3a ～モデル 3c)

方創生に寄与する意識に強い影響があることが確認できる。「地域の希望」と「シビックプライド」が与える影響度を比較すると、「地域へのコミットメント」と「挑戦意欲」に対する影響度は同程度の大きさだが、「定住意向」に対しては「地域の希望」よりも「シビックプ

ライド」の影響度の方が大きいことが確認できる。

しかし、「定住意向」に対する影響度については、年齢層ごとに違いが確認された。図14に回答者を「若年層（20, 30歳代）」「中年層（40, 50歳代）」「高齢層（60, 70歳代）」の年齢層に分けて、各年齢層で重回帰分析を実施して得られた標準偏回帰係数を示す。「地域の希望」の「定住意向」に対する影響は「若年層」で最も強い傾向があることが確認できる。反対に、「シビックプライド」では「中年層」や「高齢層」の方が「定住意向」に対する影響度は大きい。「地域の希望」は特に若い年齢層において、「定住意向」をより高める要因として働いている可能性がある。



【図14】各年齢層における定住意向に対する影響度

(表 A7 に記載のモデル 4a ～モデル 4c)

4

地域の希望を生み出す要因

4.1 地域の状態

地域の希望はどういった地域の状態に対して抱かれるものなのだろうか。「地域の希望」を目的変数、地域の状態を説明変数とする重回帰分析で要因を分析してみよう。ここでは、地域の状態を表す説明変数として、「生活領域別の環境」「地域の固有性」、「ひとの動き」「まちの動き」「社会の動き」、「政治・行政への関心・信頼」「ロールモデルの存在」、及び「地域内の格差」「人口増減の認識」を考慮した。

「生活領域別の環境」は、「以下にあげる、あなたのお住まいの地域の生活環境について、あなたはどの程度評価していますか」という質問に対して、「趣味や娯楽、レジャーを楽しむ余暇環境」「森や海、公園などの自然に親しむ環境」「買い物や外食を楽しむ消費環境」「文化芸術に親しむ環境」「電車やバスなど公共交通機関の利便性」「地震や洪水など自然災害への強さや備え」「地域の住宅水準（家の良さと住宅価格・家賃）」「近隣の居住環境（街並み景観や治安の良さ）」「地域の雇用環境（仕事内容や賃金水準）」「地域の医療体制・介護環境」「地域の子育て・教育環境（制度や施設など）」の満足度を「まったく満足していない（1点）」「あまり満足していない（2点）」

「どちらともいえない（3点）」「ある程度満足している（4点）」「とても満足している（5点）」の5段階で評価した。

「地域の固有性（ローカルアイデンティティ）」は、シビックプライドにおける重要性がよく議論されている、その地域に固有な各種の特徴である。本調査では「歴史・名所」（「史跡・名勝など観光名所がある」など）、「自然・景観」（「山、海、川などの心の風景とも言える自然がある」など）、「都市景観」（「賑やかな商店街・繁華街がある」など）、「食べ物」（「老舗のレストラン・食事処がある」など）、「生活文化」（「古くからの地域のお祭りや伝統行事がある」など）の5領域（各3項目）について、あてはまりの程度を5段階で回答させて、計15項目の平均値を「地域の固有性」[1～5点]として算出した^{注3}。

本調査では、ひと・まち・社会などの地域における「動き」が、地域の希望にとって重要であるとする仮説を立てている。「希望学」を創設した社会学者の玄田有史は、「幸福は持続を求めるものであるのに対して、希望は変化を求めるものだ」^{【11】}として、希望における「変化」の重要性を論じている。アメリカの元大統領バラク・オバマは、演説において「未来」や「希望」と共に「チェンジ（変化）」という言葉を多用したが、彼の「Change Yes We Can!」というスローガンは、人々に「ホープ（希望）」を抱かせる役割を担っていたに違い

ない。ひと・まち・社会の「動き」の認識が、地域の希望を抱かせるといふ仮説は、こうした希望学の考え方に沿うものでもある。「ひとの動き」は、「移住者」「ジェンダー平等」「少数派」「世代交代」の領域における動きの程度を5段階で評価し、計15項目の平均値を「ひとの動き」[1～5点]とした^{注4}。「まちの動き」では、「街づくり」「子育て」「経済」「ブランドイメージ」の領域における動きの程度を5段階で評価し、計15項目の平均値を「まちの動き」[1～5点]とした^{注5}。また、DX（デジタルトランスフォーメーション）やSDGs（持続可能な開発目標）に関する地域の動きを5段階で評価して、計15項目の平均値を「社会の動き」[1～5点]として算出した^{注6}。

「政治・行政への関心・信頼」[1～5点]は、「政治・行政への関心」と「政治・行政への信頼」の平均値で算出した。「政治・行政への関心」は、「あなたは、お住まいの地域の自治体の政治行政について、どの程度関心がありますか」という質問に対して、「まったく関心がない（1点）」「あまり関心がない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度関心がある（4点）」「とても関心がある（5点）」の5段階で評価した。「政治・行政への信頼」は、「あなたは、お住まいの地域の自治体の政治行政について、どの程度信頼していますか」という質問に対して、「まったく信頼していない（1点）」「あまり信頼していない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度信頼している（4点）」「とても信頼している（5点）」の5段階で回答させた。

また、その地域で生き方が面白く、目標や憧れとなるような人（ロールモデル）の存在も、地域に希望を感じさせる要因になるものと推察できる。「ロールモデルの存在」[1～4点]は、二つの設問の得点の平均値で算出した。一つ目は「面識があるかどうかは別として、あなたのお住まいの地域に「生き方が面白い」と思う人はいますか」という質問、二つ目は「面識があるかどうかは別として、あなたのお住まいの地域に「目標としたい」「憧れる」と思う人はいますか」の質問に対して、「そのような人はいなさそう（1点）」「わからない（2点）」「いそうだ（3点）」「いる（4点）」の4段階で評価した。

地域における様々な格差は、地域の希望を失わせる一要因となるものと推察できる。「地域内の格差」は、「あなたが住んでいる地域についてお聞きます。以下にあげる項目は、現在どのような状態だと思いますか」という質問に対して、「生まれた家庭環境による格差」「若者と高齢者の世代間の格差」「性別による格差」「個人の能力や努力による格差」「全体的にみた社会の格差」について、「とても小さい（1点）」「小さい（2点）」「どちらともいえない（3点）」「大きい（4点）」「とても大きい（5点）」の5段階で回答させて、それらの平均値で「地域内の格差」[1～5点]を算出した。

そして、人口の増減についての認識は、地域の希望に影響する基底的要因であると推察される。「人口増減の認識」[1～5点]は、「あなたがお住まいの市区町村の人口はどのような状態ですか。正確でなくても、あなたがお感じになっている実感でお答えください」という質問に対して、「人口は大幅に減っている（1点）」「人口は緩

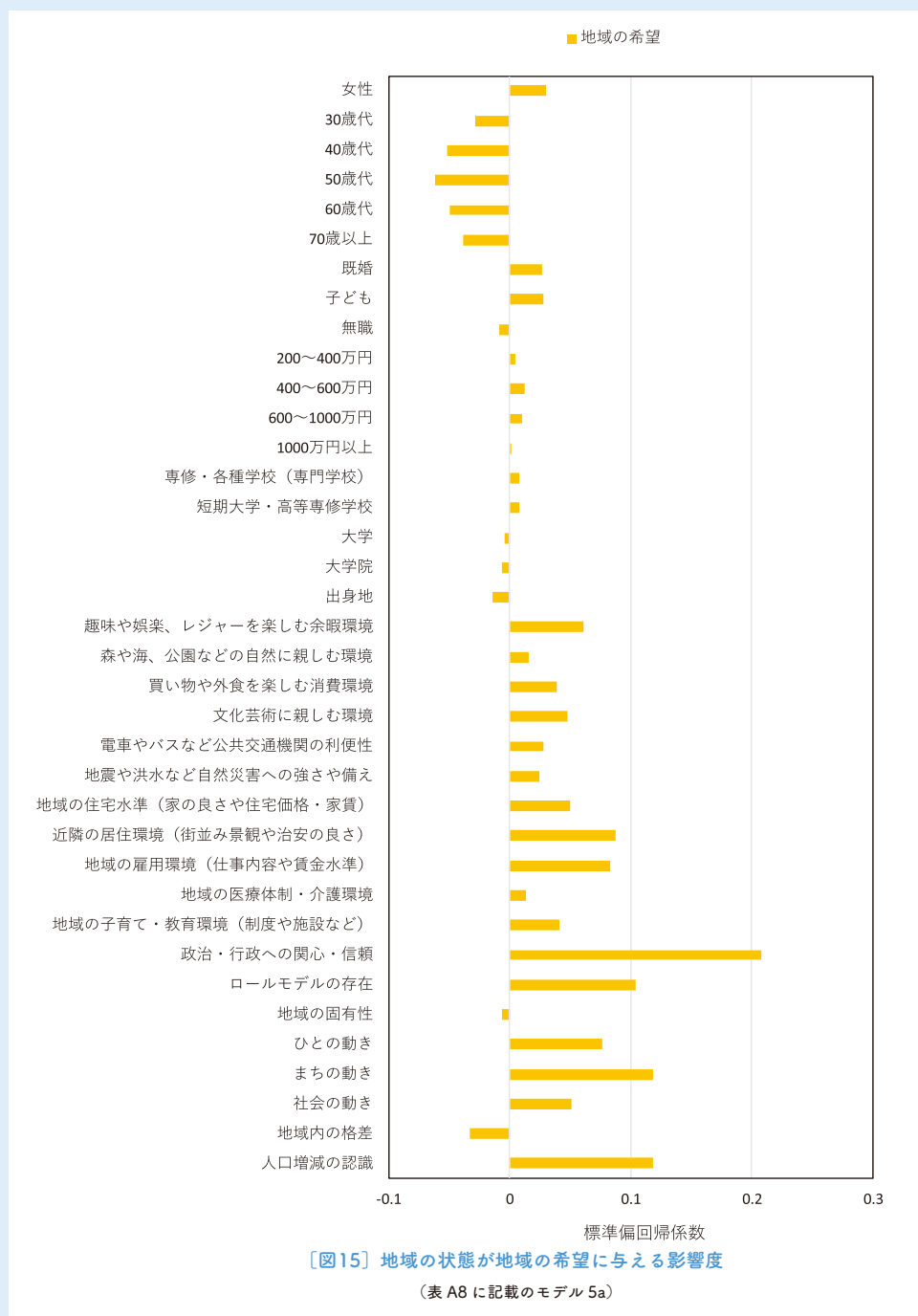
やかに減っている（2点）」「人口は横ばいである（3点）」「人口は緩やかに増えている（4点）」「人口は大幅に増えている（5点）」の5段階で評価した。

4.2 地域の希望・シビックプライドに与える影響度（重回帰分析）

図15に、地域の状態を表す各説明変数が「地域の希望」に与える影響度（標準偏回帰係数 β ）を示す。「生活領域別の環境」はおおよその説明変数で「地域の希望」に対して正の効果があることが確認される。特に「地域の雇用環境（仕事内容や賃金水準）」「近隣の居住環境（街並み景観や治安の良さ）」や「趣味や娯楽、レジャーを楽しむ余暇環境」の影響度が大きい。最も影響度が大きい説明変数は「政治・行政への関心・信頼」であり（ $\beta=0.21$ ）、政治・行政が「地域の希望」にとって重要な問題であることが分かる。また、「ロールモデルの存在」も「地域の希望」を高める効果がある。加えて、地域の「動き」を表す説明変数も全般的に強い正の効果があることが確認され、特に「まちの動き」「ひとの動き」の影響度が大きい。「地域内の格差」の増大は、「地域の希望」を下げる負の効果があることも確認できる。また、「地域の固有性」は「地域の希望」に対しては負の効果がある。

図16に、「シビックプライド」を目的変数とした各説明変数の影響度を示す。「政治・行政への関心・信頼」や「ロールモデルの存在」は「地域の希望」に対するのと同様に、「シビックプライド」に対しても強い正の影響がある。しかし、「地域の希望」と「シビックプライド」では影響に相違が見られる説明変数があることも確認できる。例えば、地域の「動き」に関する説明変数の影響度は、「地域の希望」に対する程度に比べて大きくない。また、「地域の希望」に対する影響とは異なり、「地域の固有性」は「シビックプライド」に対しては強い正の影響があることが確認できる。また、「個人の属性」の影響度の相違としては、「女性」は「地域の希望」に対して正の効果があるが、「シビックプライド」に対しては負の効果が見られ、女性は男性に比べて「地域の希望」は高く、「シビックプライド」は低い傾向にある。また、現在の居住地が自身の出身地であることを意味する「出身地」^{注7}が「地域の希望」に対してはやや負の効果があるのに対して、「シビックプライド」に対しては強い正の効果があることが確認できる。「出身地」で暮らす人の「シビックプライド」はそうでない人に比べて高い傾向にあるが、「地域の希望」にそうした相違は見られない。

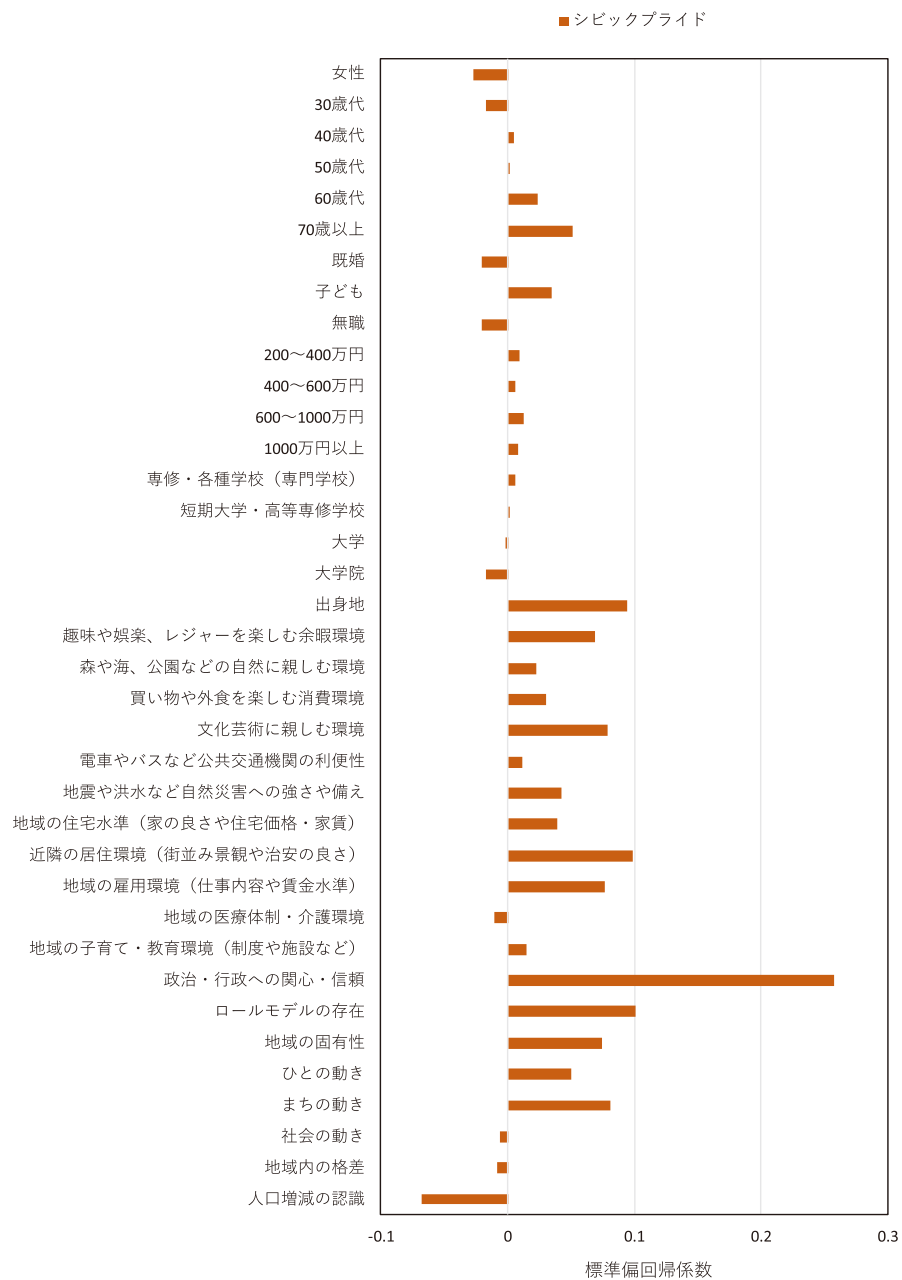
「地域の希望」と「シビックプライド」は、いずれも幸福度や地方創生に寄与する意識を高める正の効果がある。「政治・行政への関心・信頼」のように、「地域の希望」と「シビックプライド」のいずれにとっても重要な要因がある一方で、「地域の固有性」は「シビックプライド」に対してのみ、ひと・まち・社会の「動き」はより「地域の希望」



に対してというように、それぞれを生み出す地域の状態は少しずつ異なることが確認できる。

また、興味深いことに、「人口増減の認識」の効果は「地域の希望」と「シビックプライド」では正負が反転している。地域の人口が増加している認識がある人の地域の希望は高いが、シビックプライドは低い傾向にある。人口増減はその他の地域の状態と密接に関わる基底的な要因であるため解釈は困難だが、人口増減との関連を見

ても、地域の希望とシビックプライドはそれぞれに異なる地域の状態を反映することがよく分かる。また、「人口増減の認識」の「地域の希望」に対する効果の大きさ（ $\beta = 0.12$ ）と比較して、「政治・行政への関心・信頼」の方が効果は大きく（ $\beta = 0.21$ ）、「ロールモデルの存在」や「まちの動き」も同程度の正の効果であり、個人によって抱かれる地域の希望は人口増減のみで決まるものではないことが分かる。



〔図16〕 地域の状態がシビックプライドに与える影響度

（表 A8 に記載のモデル 5b）

5.1 寛容性が育むもの

ここまで、地域の希望が幸福度や地方創生に寄与する意識を高めることや、ひと・まち・社会の「動き」などの地域の希望を生み出す要因について分析してきた。

それでは、地域の希望に繋がる地域の状態は、その地域にどういった土壌があれば生み出されるのだろうか。地域の希望に繋がる地域の状態を育む、地域の気風といったものが存在する可能性がある。ひと・まち・社会の「動き」や、ロールモデルとなる生き生きした人材を生み出す地域の気風とは、どういったものがあり得るのか。多様な生き方や価値観を許容する自由な空気、すなわち寛容性は、一つの答えである可能性がある。

「寛容性」は、『地方創生のファクターX ― 寛容と幸福の地方論』など以前の報告書から着目し続けてきた、多様な価値観を許容する地域の気風を表す概念である。学術的には、都市経済学者のリチャード・フロリダが都市の経済発展の要件として掲げた3Ts「才能（タレント）」「技術（テクノロジー）」「寛容（トーランス）」の一角を成すものであり、フロリダはそれらの中でも「寛容」を最も重要な要件として位置付けている^[12]。本調査における「寛容性」は、「女性の生き方」「家族のあり方」「若者信頼」「少数派包摂」「個人主義」「変化の受容」の6領域で構成された指標であり、各領域でその地域の空気の寛容さの程度を測定している。都道府県の寛容性指標の値は、その都道府県の人口増減率と強い正の相関があり、特に人口の移動に係る社会増減率との相関係数は0.80と極めて大きい^[13]。地域の寛容性の高さによって、様々な生き方が許容されるために「ロールモデルの存在」や、ひと・まち・社会の「動き」が活性化されて、地域の希望に繋がる状態が生み出される、そうした住人の幸福や地方創生を育む土壌として寛容性が機能している可能性がある。

そこで、寛容性という「地域の気風」が、ひと・まち・社会の動きなどの「地域の状態」を育み、これが地域の希望など「地域に抱く主観評価・感情」を生み出すことで、最終的に住人の幸福度や地方創生に寄与する意識が形成されるとする、因果関係を想定した。寛容性を土台とするこの因果関係を検証するため、本分析では構造方程式モデリング（SEM: Structural Equation Modeling）によるパス解析を実施する。図17に、本分析で想定した因果関係を示す。この因果関係における各階層で考慮する要素は、ここまでの分析で得た知見を踏まえて決定する。



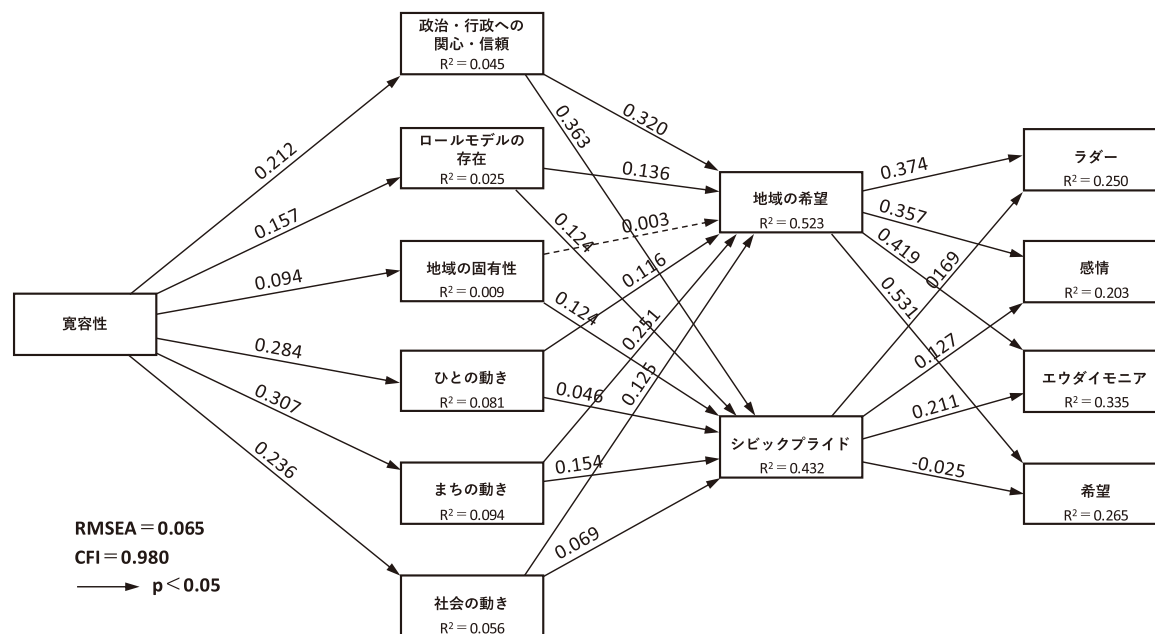
【図17】 寛容性から住人・地域の効能への因果関係

5.2 寛容性から住人・地域の効能への因果

「地域の気風」が「地域の状態」を育み、それが「地域に抱く主観評価・感情」を生み出し、最終的に「住人・地域の効能」へ繋がる因果関係を分析する。「地域の気風」として考慮するのは「寛容性」であり、「あなたがお住まいの地域の気風や社会の雰囲気になどどのようなイメージをお持ちですか。以下にあげる項目について、それぞれの程度あてはまるかお答えください」という質問に対して、各項目を「全然あてはまらない」「あまりあてはまらない」「ある程度あてはまる」「とてもあてはまる」の4段階で回答させた。6領域を各2項目で評価させており、「女性の生き方」は「結婚して子どもを持つことこそ女性の幸福だと考える人が多い（反転）」「政治や経済の場面で活躍している女性が多い」、「家族のあり方」は「年齢が来れば結婚して家庭を持つのが当たり前という考え方が強い（反転）」「結婚しないで独身で生きても肩身の狭い思いをすることはない」、「若者信頼」は「若者は年長者の言うことに逆らえない空気がある（反転）」「若者の挑戦を応援する気風がある」、「少数派包摂」は「相手の出自（出身地、血縁関係など）を気にする人が多い（反転）」「人種差別やマイノリティ差別に繊細な注意を払う人が多い」、「個人主義」は「場の空気を読まず己の主張をしがちな人は疎まれる（反転）」「他人のことにはあまり干渉しない雰囲気がある」、「変化の受容」は「成功している人を批判して足を引っ張る風潮がある（反転）」「リスクをとって新しい試みに挑戦する人が尊敬される」について、反転項目は得点を反転させて、計12項目の平均値として「寛容性」[1～4点]を算出した。

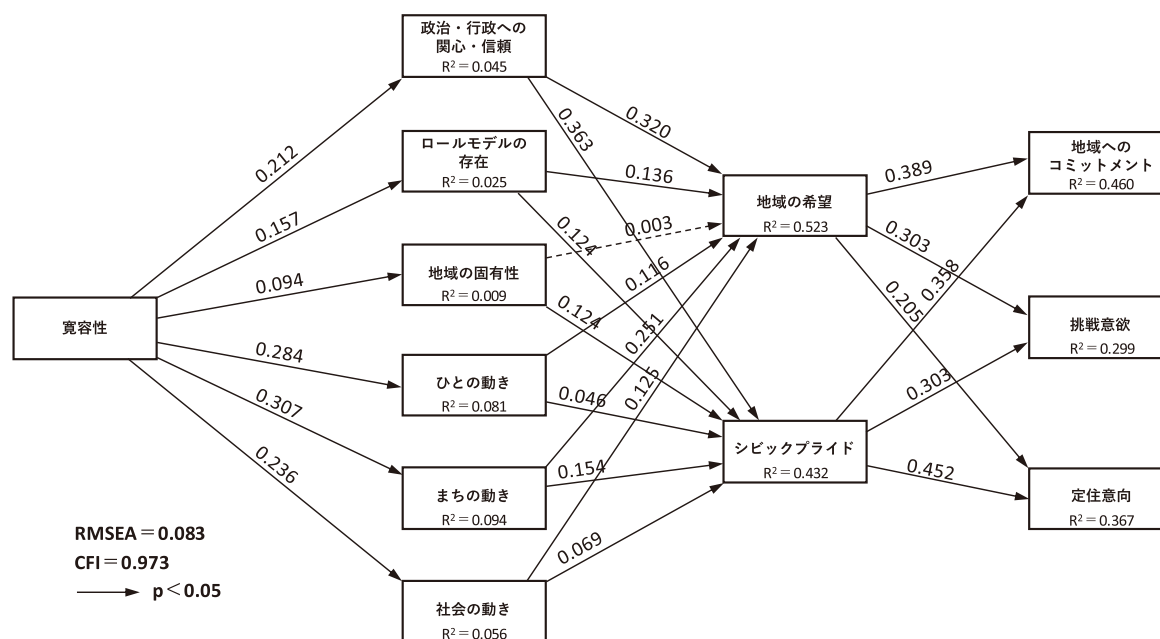
「地域に抱く主観評価・感情」として考慮するのは、「地域の希望」[1～5点]と「シビックプライド」[1～5点]である。「地域の状態」は、前の分析で「地域の希望」と「シビックプライド」への影響が確認された「政治・行政への関心・信頼」[1～5点]、「ロールモデルの存在」[1～2点]、「地域の固有性」[1～5点]、そして地域の「動き」を表す「ひとの動き」「まちの動き」「社会の動き」[1～5点]である。

「住人・地域の効能」として、幸福度は「ラダー」「感情」「エウダイモニア」、そして「希望」を考慮した。「希望」は幸福度とは少し異なるものだが、幸福度との密接な関係が認められたため、ここでは幸福度と共に効能として考慮する。地方創生に寄与する意識は、「地域



〔図18〕寛容性から幸福度へ向かう因果の影響度（標準化されたパス係数）

（各階層内の内生変数の誤差間の相関の記載は省略．表 A9 に記載のモデル 6a）



〔図19〕寛容性から地方創生に寄与する意識へ向かう因果の影響度（標準化されたパス係数）

（各階層内の内生変数の誤差間の相関の記載は省略．表 A9 に記載のモデル 6b）

へのコミットメント」「挑戦意欲」「定住意向」の3種類を考慮した。

「寛容性」を土台とする、「住人・地域の効能」への因果の繋がりを表現した因果モデルを考える上で、「地域の状態」及び「地域に抱く主観評価・感情」は、寛容性の他の要因からの影響もあることが推察される。そのため、「地域の状態」と「地域に抱く主観評価・感情」の各階層では変数の誤差同士に相関を設けた。「幸福度」の各変数も互いに強い相関があり、地域に関連する以外の要因からも様々な影響があると推察されるため、誤差同士には相関を設けた。また、「地方創生に寄与する意識」では強い正の相関関係にある「地域へ

のコミットメント」と「挑戦意欲」の誤差同士に相関を設けた。「住人・地域の効能」は「幸福度」と「地方創生に寄与する意識」をそれぞれ別の因果モデルで考慮して、モデルの適合度は比較適合度指標（CFI）と平均二乗誤差平方根（RMSEA）で評価する。

図18に幸福度を効能とした因果モデルのSEMによるパス解析の結果を示す。適合度はCFI = 0.980、RMSEA = 0.065であり、十分な適合度がある。図中に記載された数字は標準化されたパス係数であり、因果関係の強さを表すものと解釈できる。パス係数は、「地域の固有性」から「地域の希望」を除く全ての経路において5%有

意水準で有意な効果が確認された。「寛容性」から「地域の状態」の各変数への影響度を比較すると、「まちの動き」「ひとの動き」「社会の動き」への影響度が最も強く、それぞれのパス係数は0.307、0.284、0.236である。また、「寛容性」から「地域の固有性」への因果関係は相対的に弱いことも確認できる。「寛容性」から「地域の状態」を介した「地域の希望」と「シビックプライド」への総合的な効果は0.23と0.18であり、「寛容性」は「地域に抱く主観評価・感情」を高める正の効果がある。また、「地域の希望」と「シビックプライド」の「幸福度」に対する影響度を比較すると、「地域の希望」の方が強く、特に「エウダイモニア」のパス係数は0.419、「希望」に対しては0.531と影響度は大きい。「寛容性」の「幸福度」に対する総合的な効果は、「ラダー」は0.117、「感情」は0.105、「エウダイモニア」は0.135、そして「希望」は0.117であり、「寛容性」は想定された「地域の状態」と「地域の希望」「シビックプライド」を介して、個人の幸福度を高める効果があることが確認できる。

図19に「地方創生に寄与する意識」を効能とした因果モデルのパス解析の結果を示す。適合度は $CFI = 0.973$ 、 $RMSEA = 0.083$ であり、十分な適合度がある。「地域の希望」と「シビックプライド」は「地方創生に寄与する意識」に対して同程度の強さの影響があることが確認できる。「寛容性」から「地方創生に寄与する意識」に対する総合的な効果は、「地域へのコミットメント」は0.155、「挑戦意欲」は0.125、「定住意向」は0.130であり、「寛容性」は地方創生に寄与する意識を高める効果があることが確認できる。

「寛容性」は「政治・行政への関心・信頼」「ロールモデルの存在」「ひとの動き」「まちの動き」「社会の動き」を育み、「地域の希望」と「シビックプライド」を生み出し、個人の幸福度や地方創生に寄与する意識を高めることが確認された。「寛容性」が住人や地域にもたらす効能のこうした因果関係が、寛容性と人口動態の密接な関係性を生み出しているものと考えられる。

6

まとめ：人生における地域の希望の役割

6.1 本調査で得られた知見の整理

本分析では、希望が人間の幸福にとって重要な問題であることを確認した。また、地域の希望はシビックプライドと共に、個人の幸福度や地方創生に寄与する意識を高める影響があることを確認した。加えて、地域の希望を生み出す要因を分析し、寛容性が地域の希望を介して住人や地域に効能をもたらすことが確認された。本分析で得られた主な知見を以下に整理する。

① 人生における希望

- 10年後の未来の見通しで測定された希望の程度は、20歳代、30歳代などの若年層で高い。対して、性格としての楽観主義は、年齢が増加するにつれて向上する傾向がある。
- 希望の有無は所得などの生活の状況以上に、幸福度と密接な関係性がある。例えば、所得1200万円以上の希望がない者の幸福度は、所得200万円未満の希望がある者の幸福度の平均値を下回る。
- 幸福度は希望の有無と密接な関係性があり、希望のある者の殆ど（7割）が高い幸福度（ラダーで7以上）を報告している。

② 地域の希望の特徴と効能

- 地域の希望と年齢の関係性は、若年層と高齢層で高い傾向がある（U字カーブ）。
- 地域の希望はシビックプライド以上に、個人の幸福度に対して強い

影響がある。

- 地域の希望はシビックプライドと同程度に、地域へのコミットメントなどの地方創生に寄与する意識を高める効果がある。
- 地域の希望が定住意向に与える影響は、シビックプライドと比較してやや弱い。年齢層ごとに見た場合、年齢が若い者ほど地域の希望が定住意向に与える影響は強くなる。

③ 地域の希望を生み出す要因

- 政治・行政への関心・信頼、ロールモデルの存在、ひと・まち・社会の動きは、地域の希望を高める影響がある。
- ひと・まち・社会の動きの地域の希望に対する影響は、シビックプライドに対する影響に比べて強い。
- シビックプライドとの比較では、地域の固有性（ローカルアイデンティティ）はシビックプライドを高めるが、地域の希望を高める効果は見られない。
- 出身地で暮らす人たちのシビックプライドは高い傾向にあるが、地域の希望にそうした傾向は見られない。
- 地域の人口が増加している認識がある人の地域の希望は高く、反対にシビックプライドは人口が減少している認識がある人たちで高い傾向がある。

④ 寛容性から住人・地域の効能への因果

- 寛容性はひと・まち・社会の「動き」などの地域の状態を育み、地域の希望とシビックプライドが生み出されて、住人の幸福度や地方創生に寄与する意識を高める影響がある。

最後に、上述の知見を踏まえながら、地域の希望が地方創生に果たす役割について論じて本稿を終えよう。

6.2 地域の創造的な形成力

地方創生の問題を議論する際、シビックプライドについては従来から議論がなされてきた。地方創生の問題を議論するうえで、地域の希望という新しい側面に着目している点が本調査の特徴である。シビックプライドと地域の希望は、個人のレベルで互いに強い正の相関があり、地域の希望を高める地域の状態の多くは同時にシビックプライドの創出にも寄与している。例えば、地域の政治・行政への関心や信頼、或いはロールモデルの存在は、地域の希望とシビックプライドの双方に寄与する地域の特徴である。しかし、両者に寄与する要因には相違も見られ、ひと・まち・社会の「動き」は地域の希望に対する影響の方がシビックプライドに対する影響に比べて大きい。また、地域の固有性（ローカルアイデンティティ）はシビックプライドを高めるが、地域の希望に対する正の効果は見られない。また、地域の希望とシビックプライドでは、個人の幸福度や地方創生に寄与する意識など、住人・地域の効能の点においても相違が見られる。住人の幸福度に対しては、シビックプライド以上に地域の希望の方が影響は大きい。反対に、定住意向に対してはシビックプライドの方が地域の希望よりも強い影響がある。このように、地域

の希望とシビックプライドではそれを生み出す要因も、その効能も少しずつ異なるため、シビックプライドと共に地域の希望を育む意識をもつことが、地方創生につながる地域づくりにとって、そして何より、住人の幸福の創出にとっては重要であると言える。

希望学においては、希望という心理は「変化」に関わるものであると議論されてきた。そうした議論を裏付けるように、ひと・まち・社会の「動き」が地域の希望を抱くうえで重要な要因であることが本調査において示された。また、地域の希望は個人の幸福度や地方創生に寄与する意識に対して強い影響があることが確認された。哲学者の三木は「生命の形成力が希望である」と表現したが、地域に対して抱かれる希望もまた、地域を創造的に形成していく力であると表現してもよいだろう。

そして、多様な生き方や価値観を許容する地域の寛容性が、地域の希望に繋がる地域の状態を育み、住人や地域に効能をもたらすことが示された。希望学の実証的な調査において、挫折を経験したことがある人ほど希望を抱きやすい傾向にあるという、興味深い知見が報告されている^[10]。生物という存在の形成力をその根底において支えているのも、突然変異という遺伝子の試行錯誤にある。そうした事実から類推してみても、地域における様々な試みを、その失敗も含めて受け入れる寛容な空気が、地域の希望を育むための不可欠な土壌であるのだろう。

【注釈】

注1: キャントリル・ラダーの得点〔0～10点〕は、「考える最高の人生と最低な人生があるとして、あなたの人生は現在の位置にありますか。あなたにとっての「最高の人生」を10点、「最低の人生」を0点とした場合、現在のあなたの人生の位置が何点くらいになるかを教えてください」という質問で、「0点」「1点」「2点」「3点」「4点」「5点」「6点」「7点」「8点」「9点」「10点」の11段階の選択肢で回答させた。

注2: 重回帰分析において、年齢は「20歳代（18歳以上を含む）」を基準として、「30歳代」「40歳代」「50歳代」「60歳代」「70歳代」をダミー変数として考慮した。学歴は「小中学校」「高校」「その他／答えたくない」を基準として、「専修・各種学校（専門学校）」「短期大学・高等専修学校」「大学」「大学院」をダミー変数として考慮した。所得は「収入はない」「200万円未満」「わからない／答えたくない」を基準として、「200～400万円」「400～600万円」「600～1000万円」「1000万円以上」をダミー変数として考慮した。

注3: 「地域の固有性」〔1～5点〕は、「以下のことは、あなたのお住まいの地域にどの程度あてはまりますか」という質問に対して、計15項目の程度を「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度あてはまる（4点）」「よくあてはまる（5点）」の5段階で評価した。評価した項目は、「古くからの歴史や伝統がある」「史跡・名勝など観光名所がある」「昔からの産業や商売が今でも元気である」「山、海、川など心の風景とも言える自然がある」「地域の歴史を感じる街並みが残っている」「豊かな自然に親しむ環境がある」「賑やかな商店街・繁華街がある」「中心街にビルやマンションが立ち並んでいる」「郊外のロードサイドに大型商業施設が立ち並んでいる」「有名な名物や特産品・土産物がある」「老舗のレストラン・食事処がある」「地酒や郷土料理など、この地域ならではの食文化がある」「古くからの地域のお祭りや伝統行事がある」「文化芸術に親しむ環境がある」「プロスポーツチームなど地域のスポーツが盛んである」である。

注4: 「ひとの動き」〔1～5点〕は、「以下のことは、昨今の（ここ5、6年の）あなたのお住まいの地域にどの程度あてはまりますか」という質問に対して、計15項目の程度を「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度あてはまる（4点）」「よくあてはまる（5点）」の5段階で評価した。評価した項目は、「県外からの移住者が増えている」「若者のUターンが増えている」「二拠点生活で他所と往来する人が増えている」「地方議会に女性の議員が増えた」「活躍する地元企業の女性経営者が増えた」「男性と同等の地位で働く女性が増えた」「育児休暇を取る男性が増えた」「女性と同等に家事を分担する男性が増えた」「個人旅行の外国人観光客が増えた」「外国人の居住者が増えた」「社会で活躍する障害者が増えた」「政治家の若返りが進んでいる」「地元企業の経営者の若返りが進んでいる」「街で若者や子育て世代を見かける機会が増えた」「感性が若々しい元気な高齢者が増えた」である。

注5: 「まちの動き」〔1～5点〕は、「昨今の（ここ5、6年の）あなたのお住まいの地域について、以下のような実感がありますか。どの程度あてはまるかを教えてください」という質問に対して、計15項目の程度を「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度あてはまる（4点）」「よくあてはまる（5点）」の5段階で評価した。評価した項目は、「中心市街地に若者向けのお店が増えた」「市街地に新しいマンションやビルが増えた」「リノベーションしたおしゃれなお店や施設が増えた」「街におしゃれな人が増えた」「地域にクラフトビール醸造所ができた」「街づくりのためのイベントやプロジェクトが開催されるようになった」「道路や公園などみんなが楽しめる公共の場所が整備されてきた」「子育て支援の施設やサービスが充実してきた」「子連れでも気兼ねなく楽しめるお店や場所が増えた」「企業の賃金やアルバイトの時給が上がってきた」「ベンチャー・スタートアップなど、新しい会社の起業が増えた」「成長して勢いのある地元企業がある」「ITやデザインなど新しい仕事が増えてきた」「低賃金で長時間労働のブラック企業が減った」「地域の知名度やブランドイメージが上がってきた」である。

注6: 「社会の動き」〔1～5点〕は、「昨今の（ここ5、6年の）あなたのお住まいの地域について、以下のような実感がありますか。どの程度あてはまるかを教えてください。」という質問に対して、計15項目の程度を「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ある程度あてはまる（4点）」「よくあてはまる（5点）」の5段階で評価した。評価した項目は、「スマートフォンが5Gで使えるようになった」「買い物や飲食でキャッシュレス決済が広がった」「オンラインでのショッピングやサービス利用が便利になってきた」「役所の情報がスマートフォンで入手しやすくなった」「役所の各種手続きがオンラインでできるようになった」「オンライン診療ができるようになった」「テレワークを認める職場が増えた」「コ・ワーキングスペースやリモートワーク施設ができた」「カーシェアやシェアサイクルが使いやすくなった」「SDGsという言葉を身近に感じるようになった」「太陽光パネルを備えた住宅が増えた」「電気自動車を見かけるようになった」「リサイクルやリユースなど環境問題への取り組みが増えた」「地域の食材を積極的に使う飲食店が増えた」「新築住居を買うのではなくリフォームやリノベーションをする人が増えた」である。

注7: 「出身地」はダミー変数であり、「あなたが高校を卒業した時（17～18歳ごろ）、どこに住んでいましたか」という質問に対して、「今住んでいる市区町村」「同じ都道府県内の別の市区町村」「別の都道府県」「海外」で回答させて、「今住んでいる市区町村」「同じ都道府県内の別の市区町村」であれば1点、それ以外であれば0点とした。

【参考文献】

【1】三木清：人生論ノート．新潮文庫，1978(改版)

【2】Deaton, A.: What Do Self-Reports of Wellbeing Say About Life-Cycle Theory and Policy? Journal of Public Economics, 162, p.18-25, 2018

【3】ダニエル・カーネマン，村井章子（訳）：ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか？（下巻），第24章 資本主義の原動力ー楽天的な起業家．早川書房，2014

【4】Rand, K.L.: Hope, Self-Efficacy, and Optimism: Conceptual and Empirical Differences, In M.W. Gallagher, & S.J. Lopez (Eds.), The Oxford Handbook of Hope (p.45-58). Oxford University Press, 2018

【5】Snyder, C.R.: Hope Theory: Rainbows in The Mind. Psychological Inquiry, 13(4), p.249-275, 2002

【6】伊藤香織：都市への思いをモデル化する．計画行政，43(3), p.7-12, 2020

【7】経済協力開発機構（OECD）（編著），高橋しのぶ（訳）：主観的幸福を測るOECDガイドライン．明石書店，2015

【8】有馬雄祐：「遊び」から見るその人の幸せと寛容さ，島原万丈（編）“遊び”からの地方創生 ― 寛容と幸福の地方論Part2 (p.140-170). LIFULL HOME'S 総研，2022

【9】有馬 雄祐：地方創生のための寛容性と幸福の分析，島原万丈（編）地方創生のファクターX ― 寛容と幸福の地方論 (p.98-115). LIFULL HOME'S 総研，2021

【10】有馬雄祐：人生満足度と年齢の関係性の再考 ― 所得と他者との交流が「中年の危機」を緩和する，島原万丈（編）住宅幸福論Episode3 Lonely happy liberties ひとり暮らしの時代 (p.174-179). LIFULL HOME'S 総研，2020

【11】玄田有史：希望のつくり方．岩波新書，2010

【12】古澤慎一，木南莉莉，木南章：日本における都市の持続的発展とクリエイティブ・クラスー寛容性と多様性に着目してー．地域学研究，49(2), p.231-252

【13】Yusuke Arima, Manjo Shimahara, Masahumi Hashiguchi, Naoko Yoshinaga: Happiness, Tolerance, and Population Dynamics of 47 Prefectures in Japan. the 10th European Conference on Positive Psychology (ECP2022), 2022.07

A. 分析の詳細

A.1 統計モデルの一覧

本分析で実施した重回帰分析と構造方程式モデリングにおけるモデルの一覧を表A1と表A2に示す。

表 A1 重回帰モデルの一覧

モデル名	目的変数	説明変数
モデル 1a	ラダー	個人の属性、楽観主義、希望、生活の領域満足
モデル 1b	感情	個人の属性、楽観主義、希望、生活の領域満足
モデル 1c	エウダイモニア	個人の属性、楽観主義、希望、生活の領域満足
モデル 2a	ラダー	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 2b	感情	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 2c	エウダイモニア	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 2d	希望	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 3a	地域へのコミットメント	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 3b	挑戦意欲	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 3c	定住意向	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 4a	定住意向	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 4b	定住意向	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 4c	定住意向	個人の属性、生活の領域満足、地域の希望、シビックプライド
モデル 5a	地域の希望	個人の属性（出身地を含む）、生活領域別の環境、地域の状態
モデル 5b	シビックプライド	個人の属性（出身地を含む）、生活領域別の環境、地域の状態

表 A2 構造方程式モデルの一覧

モデル名	外生変数	内生変数（地域の状態）	内生変数（地域に抱く主観評価・感情）	内生変数（住人・地域の効能）
モデル 6a	寛容性	政治・行政への関心・信頼、ロールモデルの存在、地域の固有性、人の動き、街の動き、社会の動き	地域の希望、シビックプライド	ラダー、感情、エウダイモニア、希望
モデル 6b	寛容性	政治・行政への関心・信頼、ロールモデルの存在、地域の固有性、ひとの動き、まちの動き、社会の動き	地域の希望、シビックプライド	地域へのコミットメント、挑戦意欲、定住意向

A.2 変数の要約統計量

本分析で使用した変数の要約統計量を表A3に示す。表A7に記載のモデルを除き、いずれもサンプルサイズは18800である。

表 A3 変数の要約統計量

変数		平均値	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	ラダー	5.841	2.297	0	10
	感情	3.071	0.684	1	5
	エウダイモニア	2.801	0.820	1	5
	希望	3.998	1.306	1	7
個人の性格	楽観主義	3.030	1.015	1	5
地域に抱く	地域の希望	2.904	0.698	1	5
主観評価・感情	シビックプライド	2.921	0.931	1	5
地方創生に寄与する意識	地域へのコミットメント	2.695	0.826	1	5
	挑戦意欲	3.216	1.519	1	7
	定住意向	4.706	1.530	1	7
個人の属性	女性*	0.500	0.500	0	1
	結婚*	0.569	0.495	0	1
	子ども*	0.522	0.500	0	1
	30 歳代*	0.184	0.387	0	1
	40 歳代*	0.207	0.405	0	1
	50 歳代*	0.180	0.384	0	1
	60 歳代*	0.192	0.394	0	1
	70 歳代*	0.129	0.335	0	1
	200～400 万円*	0.229	0.420	0	1
	400～600 万円*	0.170	0.376	0	1
	600～1000 万円*	0.161	0.368	0	1
	1000 万円以上*	0.053	0.224	0	1
	無職*	0.193	0.394	0	1
	専修・各種学校（専門学校）*	0.115	0.319	0	1
	短期大学・高等専修学校*	0.113	0.317	0	1
	大学*	0.348	0.476	0	1
	大学院*	0.037	0.190	0	1
	出身地*	0.722	0.448	0	1
生活の領域満足	余暇生活の満足	3.202	1.034	1	5
	住居の満足	3.269	1.040	1	5
	友人や親戚との関係の満足	3.275	0.984	1	5
	仕事の満足	4.100	1.641	1	5
	健康状態の満足	3.089	1.031	1	5
生活領域別の環境	趣味や娯楽、レジャーを楽しむ余暇環境	2.844	1.005	1	5
	森や海、公園などの自然に親しむ環境	3.300	0.994	1	5
	買い物や外食を楽しむ消費環境	3.043	1.029	1	5
	文化芸術に親しむ環境	2.926	0.944	1	5
	電車やバスなど公共交通機関の利便性	2.725	1.136	1	5
	地震や洪水など自然災害への強さや備え	3.025	0.915	1	5
	地域の住宅水準（家の良さや住宅価格・家賃）	3.034	0.928	1	5
	近隣の居住環境（街並み景観や治安の良さ）	3.232	0.958	1	5
	地域の雇用環境（仕事内容や賃金水準）	2.731	0.938	1	5
	地域の医療体制・介護環境	3.035	0.961	1	5
	地域の子育て・教育環境（制度や施設など）	2.992	0.882	1	5
地域の状態	政治・行政への関心・信頼	3.002	0.866	1	5
	ロールモデルの存在	1.725	0.779	1	4
	地域の固有性	3.057	0.821	1	5
	ひとの動き	2.655	0.728	1	5
	まちの動き	2.645	0.782	1	5
	社会の動き	2.878	0.732	1	5
	地域内の格差	3.253	0.648	1	5
	人口増減の認識	2.643	1.011	1	5

*はダミー変数を意味しており、平均値は割合を表す。

A.3 モデルの推定結果

本分析で実施されたモデルの推定値を表A4から表A9に示す。

表 A4 重回帰モデル（モデル 1a, モデル 1b, モデル 1c）の推定値

	モデル 1a		モデル 1b		モデル 1c	
切片	-1.426	***	-1.084	***	-0.766	***
女性	-0.026		-0.017	*	-0.119	***
30 歳代	-0.005		-0.011		-0.056	**
40 歳代	-0.047		-0.049	***	-0.064	***
50 歳代	-0.113		-0.078	***	-0.058	**
60 歳代	-0.347	***	-0.147	***	-0.067	***
70 歳以上	-0.582	***	-0.184	***	-0.002	
結婚	-0.289	***	-0.015		-0.036	**
子ども	-0.206	***	-0.028	**	-0.058	***
無職	-0.353	***	-0.044	***	-0.222	***
200～400 万円	-0.063	*	-0.013		-0.016	
400～600 万円	-0.135	***	-0.036	**	-0.018	
600～1000 万円	-0.125	***	-0.036	**	-0.008	
1000 万円以上	-0.292	***	-0.059	**	-0.058	*
専修・各種学校（専門学校）	-0.072		-0.006		-0.037	*
短期大学・高等専修学校	-0.060		-0.015		-0.048	**
大学	-0.142	***	-0.006		-0.046	***
大学院	-0.230	***	-0.002		-0.099	***
余暇生活の満足	-0.349	***	-0.136	***	-0.129	***
住居の満足	-0.251	***	-0.025	***	-0.037	***
友人や親戚との関係の満足	-0.221	***	-0.095	***	-0.091	***
仕事の満足	-0.070	***	-0.021	***	-0.031	***
健康状態の満足	-0.243	***	-0.060	***	-0.107	***
楽観主義	-0.313	***	-0.145	***	-0.097	***
希望	-0.521	***	-0.083	***	-0.142	***
自由度修正済み決定係数 R^2	0.554		0.449		0.398	
サンプルサイズ	18800		18800		18800	

*** $p < 0.001$ (0.1%水準) ; ** $p < 0.01$ (1%水準) ; * $p < 0.05$ (5%水準)

表 A5 重回帰モデル（モデル 2a, モデル 2b, モデル 2c, モデル 2d）の推定値

	モデル 2a		モデル 2b		モデル 2c		モデル 2d	
切片	-1.124	***	-1.127	***	-0.458	***	-0.830	***
女性	-0.036		-0.010		-0.106	***	-0.023	
30 歳代	-0.070		-0.004		-0.056	**	-0.154	***
40 歳代	-0.090		-0.039	**	-0.079	***	-0.313	***
50 歳代	-0.039		-0.076	***	-0.069	***	-0.408	***
60 歳代	-0.144	**	-0.150	***	-0.083	***	-0.575	***
70 歳以上	-0.363	***	-0.196	***	-0.035		-0.645	***
結婚	-0.377	***	-0.028	*	-0.012		-0.143	***
子ども	-0.259	***	-0.042	***	-0.056	***	-0.096	***
無職	-0.420	***	-0.059	***	-0.217	***	-0.127	***
200～400 万円	-0.062		-0.014		-0.028	*	-0.015	
400～600 万円	-0.166	***	-0.046	***	-0.023		-0.037	
600～1000 万円	-0.171	***	-0.050	***	-0.011		-0.063	**
1000 万円以上	-0.412	***	-0.095	***	-0.078	***	-0.158	***
専修・各種学校（専門学校）	-0.109	**	-0.000		-0.039	**	-0.074	**
短期大学・高等専修学校	-0.028		-0.026		-0.027		-0.020	
大学	-0.138	***	-0.003		-0.029	**	-0.053	**
大学院	-0.250	***	-0.006		-0.104	***	-0.074	
余暇生活の満足	-0.425	***	-0.152	***	-0.127	***	-0.133	***
住居の満足	-0.211	***	-0.011	*	-0.010		-0.019	
友人や親戚との関係の満足	-0.294	***	-0.113	***	-0.081	***	-0.136	***
仕事の満足	-0.062	***	-0.018	***	-0.022	***	-0.003	
健康状態の満足	-0.383	***	-0.095	***	-0.131	***	-0.193	***
地域の希望	-0.535	***	-0.170	***	-0.324	***	-0.719	***
シビックプライド	-0.162	***	-0.021	***	-0.131	***	-0.086	***
自由度修正済み決定係数 R^2	0.492		0.409		0.447		0.369	
サンプルサイズ	18800		18800		18800		18800	

*** $p < 0.001$ (0.1%水準) ; ** $p < 0.01$ (1%水準) ; * $p < 0.05$ (5%水準)

表 A6 重回帰モデル（モデル 3a, モデル 3b, モデル 3c）の推定値

	モデル 3a		モデル 3b		モデル 3c	
切片	-0.484	***	-0.241	***	-0.406	***
女性	-0.126	***	-0.263	***	-0.049	**
30 歳代	-0.067	***	-0.245	***	-0.237	***
40 歳代	-0.098	***	-0.247	***	-0.379	***
50 歳代	-0.107	***	-0.278	***	-0.409	***
60 歳代	-0.069	***	-0.209	***	-0.568	***
70 歳以上	-0.055	**	-0.225	***	-0.587	***
結婚	-0.027	*	-0.093	***	-0.029	
子ども	-0.043	***	-0.087	***	-0.095	***
無職	-0.097	***	-0.134	***	-0.123	***
200～400 万円	-0.018		-0.010		-0.145	***
400～600 万円	-0.015		-0.018		-0.129	***
600～1000 万円	-0.001		-0.005		-0.126	***
1000 万円以上	-0.044	*	-0.057		-0.051	
専修・各種学校（専門学校）	-0.013		-0.085	**	-0.028	
短期大学・高等専修学校	-0.019		-0.047		-0.068	*
大学	-0.003		-0.073	**	-0.050	*
大学院	-0.041		-0.105	*	-0.128	**
余暇生活の満足	-0.012		-0.009		-0.018	
住居の満足	-0.007		-0.052	***	-0.292	***
友人や親戚との関係の満足	-0.031	***	-0.015		-0.093	***
仕事の満足	-0.011	**	-0.016		-0.036	***
健康状態の満足	-0.028	***	-0.061	***	-0.043	***
地域の希望	-0.435	***	-0.660	***	-0.339	***
シビックプライド	-0.305	***	-0.485	***	-0.643	***
自由度修正済み決定係数 R ²	0.471		0.315		0.425	
サンプルサイズ	18800		18800		18800	

*** p < 0.001 (0.1%水準) ; ** p < 0.01 (1%水準) ; * p < 0.05 (5%水準)

表 A7 重回帰モデル（モデル 4a, モデル 4b, モデル 4c）の推定値

	モデル 4a		モデル 4b		モデル 4c	
切片	-0.751	***	-0.713	***	-0.866	***
女性	-0.080	*	-0.016		-0.006	
結婚	-0.044		-0.021		-0.054	
子ども	-0.247	***	-0.043		-0.073	
無職	-0.121		-0.063		-0.099	*
200～400 万円	-0.080		-0.190	***	-0.136	***
400～600 万円	-0.125	*	-0.103	*	-0.150	***
600～1000 万円	-0.156	**	-0.082	*	-0.165	***
1000 万円以上	-0.140		-0.015		-0.001	
専修・各種学校（専門学校）	-0.099		-0.021		-0.080	
短期大学・高等専修学校	-0.098		-0.061		-0.043	
大学	-0.036		-0.052		-0.061	
大学院	-0.113		-0.048		-0.224	**
余暇生活の満足	-0.045		-0.030		-0.036	
住居の満足	-0.256	***	-0.310	***	-0.301	***
友人や親戚との関係の満足	-0.105	***	-0.095	***	-0.073	***
仕事の満足	-0.064	***	-0.030	*	-0.004	
健康状態の満足	-0.068	**	-0.042	*	-0.019	
地域の希望	-0.473	***	-0.290	***	-0.265	***
シビックプライド	-0.536	***	-0.723	***	-0.656	***
自由度修正済み決定係数 R ²	0.379		0.426		0.423	
サンプルサイズ	5517		7259		6024	

*** p < 0.001 (0.1%水準) ; ** p < 0.01 (1%水準) ; * p < 0.05 (5%水準)

表 A8 重回帰モデル（モデル 5a, モデル 5b）の推定値

	モデル 5a		モデル 5b	
切片	0.503	***	-0.109	**
女性	0.041	***	-0.051	***
30 歳代	-0.051	***	-0.042	*
40 歳代	-0.088	***	0.010	
50 歳代	-0.112	***	0.003	
60 歳代	-0.087	***	0.057	**
70 歳以上	-0.079	***	0.144	***
結婚	0.037	***	-0.038	**
子ども	0.039	***	0.064	***
無職	-0.015		-0.049	***
200～400 万円	0.008		0.020	
400～600 万円	0.024	*	0.014	
600～1000 万円	0.019		0.032	*
1000 万円以上	0.001		0.036	
専修・各種学校（専門学校）	0.017		0.017	
短期大学・高等専修学校	0.018		0.006	
大学	-0.007		-0.002	
大学院	-0.025		-0.082	**
出身地	-0.022	**	0.197	***
趣味や娯楽、レジャーを楽しむ余暇環境	0.042	***	0.064	***
森や海、公園などの自然に親しむ環境	0.011	*	0.021	***
買い物や外食を楽しむ消費環境	0.026	***	0.027	**
文化芸術に親しむ環境	0.035	***	0.078	***
電車やバスなど公共交通機関の利便性	0.017	***	0.010	
地震や洪水など自然災害への強さや備え	0.019	***	0.043	***
地域の住宅水準（家の良さや住宅価格・家賃）	0.038	***	0.040	***
近隣の居住環境（街並み景観や治安の良さ）	0.064	***	0.096	***
地域の雇用環境（仕事内容や賃金水準）	0.062	***	0.076	***
地域の医療体制・介護環境	0.010		-0.010	
地域の子育て・教育環境（制度や施設など）	0.033	***	0.016	
政治・行政への関心・信頼	0.168	***	0.277	***
ロールモデルの存在	0.093	***	0.121	***
地域の固有性	-0.006		0.084	***
ひとの動き	0.073	***	0.065	***
まちの動き	0.105	***	0.097	***
社会の動き	0.048	***	-0.008	
地域内の格差	-0.035	***	-0.012	
人口増減の認識	0.082	***	-0.063	***
自由度修正済み決定係数 R^2	0.625		0.520	
サンプルサイズ	18800		18800	

*** $p < 0.001$ (0.1%水準) ; ** $p < 0.01$ (1%水準) ; * $p < 0.05$ (5%水準)

表 A9 構造方程式モデル（モデル 6a, モデル 6b）の推定値

	モデル 6a	モデル 6b
パス係数	寛容性 → 政治・行政への関心・信頼	0.594 ***
	寛容性 → ロールモデルの存在	0.395 ***
	寛容性 → 地域の固有性	0.250 ***
	寛容性 → ひとの動き	0.670 ***
	寛容性 → まちの動き	0.777 ***
	寛容性 → 社会の動き	0.560 ***
	政治・行政への関心・信頼 → 地域の希望	0.258 ***
	政治・行政への関心・信頼 → シビックプライド	0.390 ***
	ロールモデルの存在 → 地域の希望	0.122 ***
	ロールモデルの存在 → シビックプライド	0.148 ***
	地域の固有性 → 地域の希望	0.003
	地域の固有性 → シビックプライド	0.140 ***
	ひとの動き → 地域の希望	0.111 ***
	ひとの動き → シビックプライド	0.059 ***
	まちの動き → 地域の希望	0.224 ***
	まちの動き → シビックプライド	0.183 ***
	社会の動き → 地域の希望	0.119 ***
	社会の動き → シビックプライド	0.087 ***
	地域の希望 → ラダー	1.229 ***
	地域の希望 → 感情	0.350 ***
	地域の希望 → エウダイモニア	0.492 ***
	地域の希望 → 希望	0.993 ***
	シビックプライド → ラダー	0.417 ***
	シビックプライド → 感情	0.094 ***
	シビックプライド → エウダイモニア	0.186 ***
	シビックプライド → 希望	-0.036 **
	シビックプライド → 地域へのコミットメント	0.744 ***
	シビックプライド → 挑戦意欲	0.594 ***
	シビックプライド → 定住意向	0.395 ***
共分散	e.政治・行政への関心・信頼 ↔ e.ロールモデルの存在	0.188 ***
	e.政治・行政への関心・信頼 ↔ e.地域の固有性	0.252 ***
	e.政治・行政への関心・信頼 ↔ e.人の動き	0.189 ***
	e.政治・行政への関心・信頼 ↔ e.街の動き	0.230 ***
	e.政治・行政への関心・信頼 ↔ e.社会の動き	0.226 ***
	e.ロールモデルの存在 ↔ e.地域の固有性	0.162 ***
	e.ロールモデルの存在 ↔ e.ひとの動き	0.139 ***
	e.ロールモデルの存在 ↔ e.まちの動き	0.156 ***
	e.ロールモデルの存在 ↔ e.社会の動き	0.146 ***
	e.地域の固有性 ↔ e.人の動き	0.333 ***
	e.地域の固有性 ↔ e.街の動き	0.372 ***
	e.地域の固有性 ↔ e.社会の動き	0.330 ***
	e.ひとの動き ↔ e.まちの動き	0.406 ***
	e.ひとの動き ↔ e.社会の動き	0.347 ***
	e.まちの動き ↔ e.社会の動き	0.406 ***
	e.地域の希望 ↔ e.シビックプライド	0.119 ***
	e.ラダー ↔ e.感情	0.605 ***
	e.ラダー ↔ e.エウダイモニア	0.436 ***
	e.ラダー ↔ e.希望	0.954 ***
	e.感情 ↔ e.エウダイモニア	0.125 ***
	e.感情 ↔ e.希望	0.191 ***
	e.エウダイモニア ↔ e.希望	0.209 ***
	e.地域へのコミットメント ↔ e.挑戦意欲	0.377 ***
RMSEA	0.065	0.083
CFI	0.980	0.973
SRMR	0.028	0.031
修正済み GFI	0.981	0.972
修正済み AGFI	0.933	0.899
サンプルサイズ	18800	18800

*** p < 0.001 (0.1%水準) ; ** p < 0.01 (1%水準) ; * p < 0.05 (5%水準) . “e.”は誤差項を意味する.